流星のロックマン４　～Ａτλαντ??　mystery～

nasubiboy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン４　～Ａτλαντ？？　ｍｙｓｔｅｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ４６１５Ｚ

【作者名】
ｎａｓｕｂｉｂｏｙ

【あらすじ】
地球の危機を3度も救ったロックマンこと星河スバル。彼が中学生になるころ事件は起きた・・・　ＷＡＸＡ調査隊の謎からすべてが始まる。謎の大陸とは？　闇の組織の計画とは？　すべての謎が解けた時、組織の計画とムー大陸滅亡の謎が解ける！交錯する想いと運命の中でスバルは世界を救えるのか？

記念すべき（？）なすびの一作品目！（流星シリーズ知ってること前提で書いてますんで宜しく）

プロローグ　～ＷＡＸＡ調査隊～（前書き）

始まりました
駄文ですんません
これから１００話目指して頑張ります

プロローグ　～ＷＡＸＡ調査隊～

とある謎の地・・・

「こっこれは！あの大陸の遺跡？」

ＷＡＸＡ調査隊のリーダーは言った。

「リーダーこっこれは大発見ですよ！すぐにＷＡＸＡへ連絡を」

「ああ、勿論だ、これは人類史に残る大発見だろう。この大陸の発見は人類の発展にとって・・・」

と、その時・・・

グラグラグラ～　ドドドドドド！！

「リーダーここ崩れます！はやく退避を　ぐ、ぐあー」

「・・・ポセイドン？・・・」

・・・これはスバルが巻き込まれる大事件の序章だった・・・

プロローグ　～ＷＡＸＡ調査隊～（後書き）

・・・

感想よろしく

中学校の準備（前書き）

やっと、学校終わりました

中学校の準備

ここはコダマタウン、ロックマンこと星河スバルが暮らしている。

「Ｚｚｚ・・・　Ｚｚｚ・・・」

『おーいスバル起きろ！！！　今日はスピカモールに買い物だろ！！！』

叫んでいるのはウォーロック。ＦＭ星育ちのＡＭ星人だ。

「う～ん・・・っは！いま何時？」

まだ眠そうなスバル

『８時半。約束は９時だぞスバル』

朝なのんすでに疲れているウォーロック、

「やば～い！委員長に怒られる！」

朝ごはん、着替えを風のように済ませ、ギリギリのところでバス停へ。

「スバル君おそいじゃないの。まあいいわ、それよりゴン太よ！」

この女の子は委員長こと白金ルナ。あだ名のとうり小学校では委員長をやっていた。

中学校へ行ってもやるつもりらしい。

「ゴン太君、また牛丼ですかね。朝から牛丼って」

この小人のような少年は最小院キザマロ。マロ辞典を使いこなす物知り。

「ははは、違いないね」

と、スバルが笑ってるとこで奥から走ってくる人影。あれがゴン太、よく食べ、よく遅刻する。

「ごめん委員長。なんせ朝の牛丼が・・・」

「行くわよ。もう！」

と、一行はスピカモールへ中学校で使う物を買いに行くのだった。

そして…スピカモールについた。

「ふひ～。まずは教科書のプログラム取りにいこうよ」

スバルが提案する

「えっ、まずは牛丼「お黙りゴン太！スバル君の言うとおりにしなさい！」」

というわけでプログラムやら、制服やら、靴やら、（ゴン太は牛丼用の紅ショウガも）を買った。

「よし買い物終わりね。つぎは・・・」

「委員長！お楽しみのあれですよ」

「そうだぜ！このために朝牛丼食ってきたんだから」

「えっ？なに？なにがあるの？」

何の事だかさっぱりのスバル、一方の3人はうきうきモード（実際は委員長は少しだけど）

「まっまさか！スバル君、ミソラちゃんのライブのチケット持ってない？」

キザマロが聞くと

「え～～～～～！今日ライブって聞いてないよ！キザマロ教えてよ」

めっちゃくちゃ驚くスバル

「スバルはライブなしだな。可哀そうに。」

『ふっドンマイだなスバル』

「うわ～。ブラザーのくせにわすれるなんて。スバル君」

そしてライブ二時間前、スバルだけ帰宅となった・・・

「はあ～。ミソラちゃん怒ってるかな？ライブ来てねーって言われてたし・・・」

『お前が悪いな。まあ帰るしかねーだろ』

と泣く泣くスバルは帰宅することになった

中学校の準備（後書き）

長いか？まあいいでしょう

ライブ前・・・（前書き）

ふう、連投で　あ、後ここら辺戦闘ないんで

ライブ前・・・

バス停にスバルがいた時に電話がきた

「ん？だれだろ？　ブラウズ！」

「す～ば～る～く～ん！！！なんでライブ会場にいないの！来てって言ったよね！」

この女の子こそトップアイドルで「自称戦うアイドル」、響ミソラ。電波変換でハープノートになる。

「ごめん！・・・（忘れてたなんて言えないし、どうしよ？あ、そうだ！）チっチケットが売り切れて　てさ・・・」

とっさの言い訳なんてすぐにばれるもので

「はあ～。スバルく～ん、忘れてたんでしょ・・・特等席用意してるってメールしたじゃん」

「えっ、じゃあライブ見られるの・・・やった～　今すぐ行く」

思わず笑顔のスバル

「今どこにいるの？できれば楽屋に来てほしいんだけど」

「いま、スピカモールのバス停だからすぐ行くよ」

「うん♪早く来てね～♪」

というわけでスバルもライブを見れることとなった。

そして楽屋。

「失礼します。あ、ミソラちゃん久しぶり！」

「何が久しぶりよ！ライブ忘れてたくせに！」

「（まずい怒ってる）ごめん！ほんとに」

「ふふっ、怒ってないよ♪演技♪」

流石は女優もこなすアイドル、演技がよろしいこと

「え、怒ってないの。（よかった～）」

『おい、ミソラ。お前がいるってことは・・・』

『何か用かしら？、ウォーロック』

『っげ、出たハープ』

ハープとは、ＦＭ星人でミソラのパートナーである。

「スバル君、あと1時間半くらい時間あるし。モールまわんない？」

「いいよ、（ライブ忘れてた貸しがあるし・・・）どこいく？」

「う～んと・・・とりあえずパフェ食べて、それから駄菓子屋に・・・」

デート気分の二人であった。そしてライブ直前まで飛ぶのであった。

ライブ前・・・（後書き）

次はライブですね

ライブ！（前書き）

戦闘しばらくないって言ってたけど　次やる予定だったんでしたすんません

ライブ！

「み～ん～な～！来てくれてありがとう！盛り上がっていくよ～♪」

「委員長始まりましたよー！」

「うおーーー！！！始まった！！ミソラちゃ～ん！！」

「ゴン太！うるさい！」

委員長グループは一番前の列。と、言うのもキザマロがチケット発売日前日から店に並んでいたからである。

少し離れて、舞台裏。ここにスバルはいた・・・

「うわ～。横から見ると違うねー　こんな近くで見られるなんて！」

『そうだな！でも俺は見れないわ・・・』

「なんでロック？」

『いや・・・ハープが・・・』

『お呼びかしら？いくわよっ』

『いやだ～！助けてくれスバル！う、ウワ～』

地球は救えても、ロックを地獄からは救えないスバルであった・・

・

そんな時・・・

「ドガ～ン！！！」

「ばっ爆発？ロック行こう、っていないか？」

『おう、いるぜ。逃げてきた』

「んじゃ行くよ、トランスコード００３、シューティング・スター・ロックマン！」

ウェーブロードに行くと、ジャミンガーがいた。

『所詮クズか、久しぶりの戦闘腕がなるぜ！』

「ロックはいつも勝手にウイルス撃退してるじゃん！」

『ロックマンとしての戦闘だよ、ひさしぶりなのは！』

「いくよ！ロック」

『おう！』

ライブ！（後書き）

次はジャミンガー戦　余裕です

ライブ再開（前書き）

ジャミンガーって流星1しか出てなかった気が・・・

ライブ再開

「ロックバスター！」

ジャミンガーは、不意打ちを食らって大ダメージ、もう瀕死だ。

『スバル、とどめだ！』

「うん。バトルカード、キャノン！」

ジャミンガーはなぜか反撃もせず、ニタッと笑ってデリートされた・・・

「ふう、終わったね」

と、そんな時スバルは周りが見えてなかった・・・

『おい、スバル。お前にしては珍しく目立ちたがったか？ふっ』

「えっ？」

そう、スバルはライブのステージのど真ん中で戦闘をしていたのだ。ライブはミソラだけでも

パニックなのに、ロックマンの登場でさらに大変なことに・・・

「「「「「「「「ワ～～～！！！世界を救ったヒーローとミソラちゃんの共演だ！！！」」」」」」」」

「うっ！まずい、ロックどうしよう？」

『しらねーな、そんまま目立っとけ』

「え～！僕、目立つの嫌いだって・・・」

そんなヒーローの心情なんて関係なく、ライブはさらに盛り上がっていく。

「みんな～！今日は世界を救ったヒーローも来てくれたし、最後の曲は一緒に行くよ～♪」

ミソラはロックマンにウィンクした。

「（は～・・・一緒にって何すればいいの？）」

「それじゃー行くよー♪シューティングスター！」

「「「「ワ～！！！！！」」」」

「ウェーブロード　広い世界　夜空見上げ　一人ぼっち　キズナ探して　ただ　彷徨う

ウソに怯え　逃げ続けて　孤独にさえ　気がつかずに　ただ　歌い続けていたの

星の光が　輝く　私の　ココロに　降り注ぐ　そして　あなたと巡り合えたんだ

Our band was discovered then

震えて　泣いていた　私を　見つけてくれたね　シューティング・スター　暗闇　照らし　駆けてく

その　笑顔に　チカラ　もらうんだ　怖いものなんか何もない

振り返らない　ずっと　前を見て　光　掴む　キミの　笑顔　それが　私の　ハートなんだよ

シューティング・スター　暗闇　照らし　駆けてく」

会場は最高潮に盛り上がって幕を閉じたのであった・・・そしてライブ終了後。

～委員長グループ～

「なんでスバル君が出てきたのですかね、マロ辞典にも載ってないですよ」

「そんなことより、駄菓子屋行こうぜ委員長。腹が減った～」

「マロ辞典とやらに載ってるわけないじゃないの、あとゴン太、駄菓子屋にはいかないで帰るわよ」

「え～、いかないのかよ～」

「いくわよっ！」

という感じでコダマタウンへ帰って行った委員長グループだった。

ライブ再開（後書き）

次はスバル視点で

ライブ後（前書き）

ライブ後ですね

ライブ後

～スバル&ミソラ～

「ふう、まさかステージのど真ん中に自分がいたとは・・・恥ずかしいよロック」

『仕方ねーだろ　ックック、俺は目立ててよかったぜ』

「まあロックはそうだけど・・・」

と、舞台裏でそんな会話をしていると

「ス～バ～ル～く～ん♪　かっこよかったよ♪」

ライブが終わってすぐなので、ライブ衣装のまま走ってきた。

「あ、ミソラちゃん　おつかれ」

「うん、スバル君のおかげでジャミンガーに邪魔されずに大成功のライブだったよ♪」

「んじゃ、僕かえ「ちょっと、このあと楽屋に来てくれない？」」

「あ、うん　いいよ。んじゃ先行ってるね」

「うん　すぐ行く♪（今日絶対言うって決めてたんだから　ファイトよミソラ）」

『ふふっ、今日こそ伝えるんでしょ　ミソラ』

「うん・・・ライブよりドキドキするな・・・」

『だいじょうぶよ♪ミソラなら』

「でっでも、もしスバル君が私のこと嫌いなら・・・まっまたは、委員長のことが好きとか・・・」

と、一人で緊張しているミソラと何も知らないスバルであった。

ライブ後（後書き）

次は告白・・・と言いたいんですが邪魔が入ります

告白・・・失敗・・・（前書き）

どんどん進めたいんだけどなー

告白・・・失敗・・・

～楽屋内～

「ミソラちゃん遅いな～　なんか話あんのかな～」

スバルは広めの楽屋にポツンと一人でいた

「なんだろう？いつもより顔が赤かったような・・・」

『ふんっ、俺はわかったぜ、名探偵の俺の推理では・・・ずばり！』

「ずばり？なに」

『ズバリ・・・あいつは・・・「ガチャ！」』

「はあはあ・・・スバル君待った？マスコミとマネージャーに追われてて」

「いや、大丈夫だよ、んでなんの話？」

「あっあのさ、すっスバル君て・・・好きな人いる？・・・」

ここでスバルは少し今回の話を感ずく、ミソラは顔が真っ赤だ

「いっいるよ（まさか・・・この展開は）」

「あのさ、わたしスバル君のことが・・・「ガチャ！！！ミソラいるか？」」

マネージャーが駆け込んできた、そして

「おいミソラ、ドラマの撮影の時間だぞ！急いで準備しろ！」

「・・・うん（せっかくいいところだったのに）」

「んじゃ、ミソラちゃん　僕は行くね（まさかな～ミソラちゃんが僕のこと・・・）」

『いくか　スバル』

と、雰囲気ぶち壊しで今回は終わってしまうのだった。

告白・・・失敗・・・（後書き）

マネージャー出てきちゃって台無しですわ

暁の呼び出し（前書き）

冬休み入る前に１０話こえたい！

暁の呼び出し

あのあと、スバルは帰宅した。

そして春休みも終わり・・・入学式前日

「あ、暁さんからメールだ、なになに・・・」

〔おう、久しぶりに送ったぞスバル、ちょっと明日来てくれないか？学校には一週間休むってことで〕

「え、なんだろ？学校休むまでってことは大事なことかな」

『まあ　行くしかねーだろ』

スバルはこのことを母に伝え許可をもらって入学式から一週間休むこととなった

～謎の大陸～

「ポセイドン様、地球で何か動きが・・・」

「まったく、小賢しい・・・」

「先の探索隊と関係があるのでしょうか？」

「あるとしたら、ぶちのめすだけだ」

と言い残しポセイドンは奥の間へきえていった・・・

暁の呼び出し（後書き）

なぞですな

「・・・ポセイドン・・・」（前書き）

なぞめいてます

「・・・ポセイドン・・・・」

～ＷＡＸＡ本部～

「ここひさしぶりだね～　あの事件以来か・・・」

『おう、また事件が起きりゃ暴れられるぜ！』

「いや、平和な方が僕はいいんだけど・・・」

そして中に入る二人であった。

「暁さん！久しぶりです」

「おう、サクサクサク、ひさ、サクサクしぶりだなサクサクサク」

「はい、けがは治ったのですか？」

「おう！このとうり元気だ」

うまい棒を食べ終わった暁は答えた。

『あいつは元気なのか？』

『久しぶりですねロック・・・ちゃん』

アシッドはヨイリー博士のようにしてロックをからかう

『てめー　ぶっ殺すぞ！』

ロックはやはり好戦的なのであった。

「それで、暁さんなんの用事で？」

「ああ、ちょっと司令室まで来てくれ」

～司令室～

「この音声を聞いてくれ・・・」

＜ザ～・・・アト・・・・ス・・の・・・・ポセイドン？・・・・・・ザザ～＞

「なんですかこれ？ポセイドン？」

「ああ、俺たちもわからん、この調査隊はＷＡＸＡっていっても独立してた調査隊だからな」

「独立ってどういうことですか」

「ＷＡＸＡのなかで、何かを研究してた部隊らしいんだが・・・何をやってたか上に報告してなかったらしい」

＜ポセイドン＞という言葉しかわからない暁＆スバルは調査を進めた

「でも、暁さんなんでぼくがこの調査に？」

「それは・・・ヒーローだから、じゃだめかな？」

『（暁のヤロー、何か隠してやがる）』

「まあ、いいですけど・・・」

そして、通信の発信源やら、調査隊の部屋を片っ端から調べたが・・・

「部屋からは何も出なかったそうですよ、暁さん通信は？」

「サクサクサク、今ヨイリー博士が調査中だ」

「シドウちゃん、あ、それからスバルちゃんちょっときて」

ヨイリー博士に呼ばれて行ってみると・・・

「この調査隊はね、通信の発信源をつかませないために鍵をかけてるの」

「いったいなんのために？」

「わからないけど・・・今からじゃもうこの事件は迷宮入りってことね」

「サクサクサクそうですかサクサク」

この調査で一週間経ってしまったのでスバルは調査メンバーから外れた

「シドウちゃん、スバルちゃんがまた地球を救ってくれると？」

「はい、彼は俺が認めたヒーローなんで・・・」

「あの大陸の力は強大だけど・・・スバルちゃんを巻き込むつもり？」

「彼の力がなければ・・・あの大陸とその裏で動いてる組織には勝てないと思ってますんで」

何か知っている二人はまた調査を始めた・・・

～闇の組織～

「Y、次の計画へ移ろう・・・これが私の計画の一歩だ」

「ふふふっふ、俺は殺しができりゃいいんだけどな」

「まあそう言うな、まだお前は動かん。トート、ハイドとやらを呼んで計画をやらせろ」

「はっ、Z様了解です」

「おいブラック・・・いやZよ　なぜそこまでしてロックマンとやらを狙うんだ」

この暗い部屋で光っている画面にはスバルとミソラのデーターが・・・

「ふっ、計画は１００％の成功率に成るように邪魔者は消すもんだよ・・・」

「卑怯な手を使ってもか？」

「そうにきまっている！」

「ふ～ん、まあ俺には関係ないか・・・」

そしてYと呼ばれる男は闇へ消えた・・・・・

「・・・ポセイドン・・・」（後書き）

闇の組織ってなんでしょう？
感想待ってま～す！

中学校初登校（前書き）

中学校に・・・

中学校初登校

『クソ！起きやがれ～！スーバールー！！！』

「Ｚｚｚ～Ｚｚｚ～　・・・・・・」

例のごとく起きないスバルかと思いきや・・・

『ちっ、こうなったら・・・』

「おきてるよ！いつもロックがどうやって起こしてるのか調査してたんだけど」

『最終手段は今日はなしか・・・』

「最終手段って何？まあいいや、ご飯食べよ」

時刻は７時１０分、意外と今日は早めなので余裕でご飯をたべて学校へ向かった

「委員長今日は来ないんだった、これならもっと遅くに起きればよかった・・・」

『うるせー！こっちの身になれ！まあいい、急げスバル』

～学校～

「おはよう委員長、キザマロ」

「あらスバル君、久しぶり。」

「スバル君、委員長はまた委員長になりましたよ」

「そうか・・・あれゴン太は？」

「おうスバル今来たぜ！」

と、一週間ぶりに委員長メンバーと話すスバルだった。そしてチャイムが鳴りみんな座った

「あれ、僕の横ってだれ？」

「スバル君知らないんですか、この席は・・・「ガララ」」

「お～い、みんなー席についてるか？」

とは言ってきたのはどこにでもいそうなふつーの先生（先生たちはストーリーにあまり出ません）

「お、あいつはまた遅刻か～んじゃ出欠取るぞ～あ、その前にスバル自己紹介しろ」

「はっハイ」

前に出るスバル

「えーっと、星河スバルです。よろしくおねが「ガラガラガラ、バン！」」

「すいませ～ん、遅れました♪あっ！すばるくん！」

と遅れてきたのはミソラだった、スバルは超びっくり&他のクラスメートは落ち着いている

「早く席につけ、まったくアイドルだからっていつも遅刻とは・・・」

そしてスバルの自己紹介もおわり、席に着いた

「ミソラちゃんがこの学校なんて聞いてないよ、キ～ザ～マ～ロ！」

「なっ、僕のせいですか。マロ辞典には前から載ってましたよ」

「ま、いいじゃないの二人とも。宜しくねスバル君♪」

クラスメートの何人かはなぜスバルがミソラと知り合いなのか分からず、他の生徒はスバルがロックマンだからだと知っていた

・・・そして帰りのホームルームが終わった

『帰ろうぜスバル！』

「うん、ん？メールだ・・・ミソラちゃんからだ」

〜放課後展望台に来て、この前伝えたかったこと言うから・・・〜

スバルは顔が赤くなった、とうのミソラはというと

「はい、ちょっと待って、今サインするからはいはいおさな～い」

生徒からのサイン要求で忙しそうだった

「んじゃ、先に行くかロック」

『おう！』

展望台へ向かったのだった・・・

中学校初登校（後書き）

王道を少しいじくってみました（ふつうはミソラが転校生だったので）

次は告白です　上手く書けるかな？

告白のまえ（前書き）

ついに十話こえたか～

告白のまえ

～展望台～

「ミソラちゃん、まだかな～」

かれこれ1時間待っているスバル

『まあ、あいつもアイドルだしな』

「ロック、この前・・・ズバリ！って言ってたけどミソラちゃんの話ってなんのことかなー？」

『ああ、ズバリ・・・新発売のうまい棒の話だろう』

ドヤ顔をするロックを引いた目で見るスバルはどうすればいいのか分からなかった

「そっそうなのかな？（まさか、ここまでロックが鈍感とは）」

『おう、なんなら俺を名探偵って呼んでくれてもいいんだぜ』

『んじゃ、行きましょうかKY探偵♪』

『っげ、ハープ！いやだ～』

さ～よ～な～らロックとばかりに手を振るスバルだった

告白のまえ（後書き）

次こそは告白、ってかロックばかすぎやろ！

告白（前書き）

やっとか〜つかれたわ

告白

～スバル視点～　3時間後（待ち合わせ時間から4時間半）

ロックがいなくなってからすこしたったが、ミソラはまだ来なかった・・・

「ハープが来たからすぐ来ると思ったんだけどな・・・」

「うう、さむっ。ハッハクション・・・まだかな～」

すっかり暗くなり、夜空には星が輝きだした・・・

「母さんに遅くなるってメールしておこう・・・」

スバルはドキドキしながらミソラを待っていた

～ミソラ視点～

「ううわ～！！！や～ば～い！！！」

全力でダッシュするミソラ、なんとあの後マネージャーに呼び出されて・・・

「スバル君怒ってるかな～・・・このままじゃ・・・」

電波変換したいとこだが、ハープにロックの面倒を任せたためできなかった

「ぐすっ（スバル君に告白するときに泣いててどうするんだ・・・）」

涙をこすってやっと展望台へ着いた

「（あ、スバル君待っててくれてる）」

～通常視点（スバル視点）～

「あっ！ミソラちゃん！」

「ごめんスバル君こんなじかんまで・・・（おこって・・・ない？）」

「（ちょっと意地悪してみるか・・・）遅い！」

「（まずい）ごめん！ほんっとごめん！！！」

「ふふふ、おこってないよ・・んでなに？」

「あっ、あのさスバル君、わっ私とさ・・「待って！！！」？」

「ぼっ僕から言うよ・・・」

「（えっ？）」

「ミソラちゃん！前から・・・前から好きでした・・・僕と、付き合って下さい！」

「私こそ、好きでした・・・よろしくお願いします」

そう言ったミソラは涙目だった、

「んじゃ、夜遅くだし帰ろうよ」

「ぐすっ、うん・・・」

「（泣いてる？）明日また学校で逢おうね」

「ふふっ、明日は土曜日だよ。でもさ、うちこない？スバル君来たことないし・・・」

「ベイサイドシティーだっけ？」

「うん、スバル君の家に迎えに行くから♪んじゃ～ね」

「うん」

家に帰る時二人は顔が真っ赤だったとさ・・・

告白（後書き）

今日はここまで・・かな　次も書きたいんだけどな～
感想まってます！

ミソラの家に行く朝（前書き）

視点が入れ替わるのに注意

ミソラの家に行く朝

～スバルの家～

「・・・・・」

『Ｚｚｚ・・・Ｚｚｚ・・・』

昨日からドキドキして眠れていないスバル、今は時刻４時

「ふう、寝れないしテレビでも見てるか・・・」

一階に降りると土曜日でも朝早く起きている大吾＆あかね

「あらスバル今日は早いのね」

「おう、スバル・・・スバルの顔も見れたし行くか！それじゃあ、あかね」

「「いってらっしゃ～い」」

大吾はいつも４時出勤していたのをはじめて知ったスバルであった

「（こんな朝早いんだね父さん・・・）」

早めの朝ごはんを食べてふと思ったスバル。と、そこにあかねが

「んで、どうなのミソラちゃんとは？」

「ブ～っ！！！（なんで！！？）」

お茶を吹いてしまうスバル、面白そうにあかねは続ける

「あら、図星だった？」

「（ホントは知ってたくせに）」

顔を真っ赤にしててれるスバル、パンを口に詰め込み、逃げるように部屋へ行った

「ふふっ、スバルも大きくなったわね。前はあんなに小さかったのに」

嬉しそうなあかねだった

～ミソラ宅～

「（ハープは寝てるみたい）・・・」

『起きてるわよミソラ、寝れなかったんでしょ』

「うん・・・」

今は朝４時半、まだ約束の９時には遠い

「メールしてみるかな、起きたら返信してって（早く来ればいいな）」

そして朝早くにメールをしてご飯を食べた

～スバルの家～

「あ、メールだ・・・なになに？」

〔スバル君、起きたら返信してね～すぐ行くから♪〕

「う～ん・・・（いましたら迷惑かな？）一応しとくか」

そして着替えなどを済ませていくスバルだった

～ミソラ宅～

ミソラは朝ごはん（シリアル）を食べていた

「ん！スバル君今日早いんだね！早く行かなきゃ♪」

山のようなシリアルを一気に口に含んで、いつもの服に着替えてスバルの家へ向かった

～スバルの家～

そして5時になった

「まだ5時ってテレビショッピングやってるんだね・・・」

テレビでは高圧洗浄機のマテリアルウェーブを紹介していた

『おい、これセットで１５０００ゼニ―だってよスバル！！！買おうぜ』

いいカモのロックを冷たい声で返事をするスバル

「はあ、ロック高圧洗浄機って何に使うのさ・・・いらないでしょ」

『でっでも・・・あの値段で・・・「ピンポーン」』

「あ、ミソラちゃん来たかな？」

ドアを開けると眠そうなミソラが今できる満面の笑みをした

「おはようスバル君♪いこっか？」

「うん、母さん行ってくるよ～！」

「は～い、行ってらっしゃい」

そしてベイサイドシティのミソラの家に行くのであった

～謎の大陸～

「ポセイドン様、ムーの生き残りとやらが来ました」

「そうか・・・通せ！」

「しかし・・・」

奥から白い髪の少年が来た、

「ふん、貴様がポセイドンか。オリハルコンはどこだ」
「答える義理もないわい、用事はそれだけか」
「ああ、教えないならこんど奪いに来る・・・」
「ははははっ！おぬしごときに奪えるかな？」
「ふんっ」
そして白い髪の少年は去っていった
「ポセイドン様なぜあの男を通したので？」
「・・・いや、やつは何か組織について知っているかと思うたのじゃが・・・」
～闇の組織～
「ハイドとやらをロックマンの元へ向かわせとけ」
「Z様・・・やつは弱いから勝てぬぞ・・・」
「トート・・・いや？、やつにはロックマンのデーターを取ってもらう」
「所詮は捨て駒ってか、ブラックよ」
「Yいつの間に？まあいい準備させておけ」

「「はっ」」

「（さてロックマンどうでるかな）」

そしてまた闇に消えた・・・

ミソラの家に行く朝（後書き）

次もすぐ書きたいな～

ミソラ宅（前書き）

明日から学校か・・・

ミソラ宅

～ベイサイドシティミソラ宅前～

「うわ～・・・でっかくない」

ミソラの家は超高層ビルの一室だった

「よし、入ろうスバル君」

ガードウィザードに暗証番号を確認してもらい中へ入った

「ホテルみたい・・・（ミソラちゃんはやっぱトップアイドルなんだよな・・・）」

「んじゃ、うちの部屋行こう♪」

～ミソラの部屋～

「・・・（ピンクばっかだな～女の子の部屋ってこんな感じなのか？）」

ミソラの部屋はピンクを基調とした部屋だった、

「どうかな？」

「あ、うん（何て言えばいいんだ？）」

返答に困っているスバル、とそこで

『ふふふっ、スバル君照れちゃって』

「いっいや照れてないよ・・・」

顔を赤くするスバル

「飲み物持ってくるね～♪」

ミソラは飲み物を取りに行った

『ケッ、俺は来る意味なかったかもな』

「そう言わないでよロック、ほらハープもいるんだしさ」

『スバル、俺は地獄に行きたくないぜ・・・（何か電波を感じる・・・）』

『それじゃあ、今日は天国にいきましょうか♪』

そんな感じ?でロックは連れて行かれたのであった

「ス～バ～ル～君、飲み物持ってきたよ♪」

飲み物（紅茶）を飲みながら楽しそうに会話をする二人だった・・・

「ふふふっ、私の脚本が出来上がったぞロックマン」

二人に危機が迫っているとはまだ誰も知らなかった・・・

ミソラ宅（後書き）

ハイドが次出ます

ファントムブラック現る（前書き）

ハイドってしつこいですよね

ファントムブラック現る

～ロック＆ハープ～

『おい・・・どう思うこれ？』

『状況は最悪ね、早く二人に知らせなきゃ』

二人の周りには大量のウイルスがいた、軽く２００匹は超えるだろう

『（この電波、ハイドじゃないか？）おい、お前はおかしな電波を感じないか？』

『うん、前に会ったことがあるような気がするわ』

二人は急いでスバル＆ミソラのもとへ向かった

～スバル＆ミソラ～

「ところでなんでミソラちゃんはコダマタウンの中学校来たの？」

「えっ！（スバル君がいるからだよ）いや、こっちの中学校は私立だしさ・・・」

「へえ～（まさか僕がいるからはないよな）」

そんな会話をしているときにロックたちが到着

『おい！スバル！ウイルスが大量発生してるぞ』

「え！分かった行こう、トランスコード００３、シューティング・スター・ロックマン」

「ハープ私たちも行こう　トランスコード００４　ハープ・ノート」

～ホテル玄関～

「いくよ、ハープ・ノート！　キャノン　プラズマガン」

両手を銃に変えどんどんメットリオを倒していく

「ハープ私たちも行くよ　ショックノート」

二人は５分もしないうちに２００匹ぐらいのウイルスを全滅にした、が・・・

『おいスバル、あいつだ！ハイドの野郎だ！』

「ふふふっ・・・ロックマンいいアドリブだ、しかしこの主役がお前を倒す」

「こい！ハイド！ミソラちゃんさがっててて」

「うん（スバル君なら勝ってくれるよね）」

「行こうロック」

『おう　腕がなるぜ』

「ふふふ勝てるのかな？ロックマン・・・」

そしてハイド戦が幕を開ける中・・・

「ハイドのやつ、俺の命令を破りやがって・・・死刑判決だな」

闇の組織の幹部、Ｙというローブを被った男は遠くでそうつぶやいた。彼の手には人形劇などで使う道具が握られていた・・・

ファントムブラック現る（後書き）

Yはこのストーリーで重要なんで忘れないで覚えておいてください

ファントムブラック戦（前書き）

眠いっすな

ファントムブラック戦

～ミソラのマンションの玄関フロア～

「バトルカード　ロングソード！」

「フフフハハハ！ファントムクロー」

お互い一歩も譲らぬ二人、しかしブラックには余裕がなくギリギリといったところだ

「くそ！もう一回だファントムクロー！」

ブラックが仕掛けたがロックマンはすぐにかわす

「エドギリブレード！　ワイドソード！」

今度はロックマンから攻める、２刀流の連続攻撃だ

「くそ・・・」

流石にブラックも受け切れずくらってしまう

「まだだ！！！」

しかし打たれずよく再び攻撃を仕掛けてくる

「ロック！らちが明かないけど、ノイズチェンジできないしどうする？」

『このまま続けりゃ、そのうちすきを突いて勝てるだろ』

二つの影はまた衝突し、それを一人ポツンと見守るミソラ

「スバル君ならきっと勝てるよね」

『負けるわけないじゃないの』

「わたしの・・・私の脚本は完璧だ―！！！」

「僕だって負けるわけにはいかないんだ！バトルカード　インパクトキャノン！」

インパクトキャノンを打たれたブラックは飛ばされ、二人の間に距離ができる

「私は負けない！！！ファントムスラッシュ！！！」

『来るぞスバル！』

「うん！これで最後だ！」

ズバッっとファントムスラッシュがロックマンを切ったと思いきや・・・

「バトルカード　ヘンゲノジュツ　終わりだハイド！！！」

「なにっ！ぐっ・・・」

ブラックは負けてうずくまる、
「ミソラちゃん終わったよ・・・帰ろう」
「うん」
二人が帰ろうとしてる時ブラックは
「くそ・・・私の脚本は・・・かん・・・」
電波変換を解かれたハイドは、マンションのまえで倒れていた
「見苦しいなハイドよ」
ローブをはおり、十字架の仮面の男は言った
「なっ、マドーラ・・・様、なぜここへ」
「おい、俺の取ってこいといった品は・・・」
「（まずい忘れてた・・・くそっ）次は必ず取って「バン！」」
「お前は用済み・・・でもまだ使えるな」
というとマドーラという男はハイドの髪を一本ぬきとった
「ぐっ、何をする」
「ふっ、人形劇を始めるだけだよハイド君・・・」

男はほほ笑んだそして、糸のようなものを巧みに動かしていく

「まっまさか、それは・・・」

ハイドは無理矢理操られ電波変換させられる、そして、人形劇の人形のようにぎこちなくミソラの部屋へ向かわされて行った・・・

「第二ラウンドだロックマンよ・・・」

ファントムブラック戦（後書き）

マドーラ怖し・・・マドーラ＝Ｙです

人形劇の始まり始まり（前書き）

・・・（書くことない）・・・

人形劇の始まり始まり

～ミソラの部屋～

「玄関だいぶ壊しちゃったね・・・」

「大丈夫だよ、ロックマンは世界を救ったヒーローなんだから♪」

照れるスバル、しかしこの時この部屋いやビル自体が大変なことになるとは思ってもいなかった

「スバル君いつ帰るの？暗くなってきたけど・・・」

「えっ、早く帰った方がいい？」

「え、うん、いやスバル君のお母さんも心配してるかなって（時間言わなきゃよかった・・・そうしたらスバル君ともっと一緒に入れたのに・・・）」

「大丈夫だよそこは、なんか母さん機嫌よくてメールにこんなこと書いてきたし」

〜スバルへ　もしよかったら今日はミソラちゃんの家に泊まってくれば？今日は結婚記念日だから、大吾さんと二人で食事に行くつもりだったから　それに付き合ってる二人の時間を邪魔するわけにもいかないしね　あかね〜

「・・・（スバル君と二人きりの夜・・・うれしい）」

「あ、でも迷惑だよね・・・そのうち帰るよ」

「いっいや、私も独り暮らしでさみしいし泊って行ってもいいよ・・・」

「（うそだろっ！母さんの冗談が現実に？）でっでも・・・」

顔を赤くする二人、いい雰囲気になってきたところへやつは来る・・・

『（ん？ハイド？）おいスバルハイドの電波がする・・・』

『全くあんたは空気読めないの？（でも確かに・・・）』

その時！

「ガッシャーン！！！」

「スバル君後ろ！」

後ろを振り向くとガラスを割ったハイドが宙に浮いていた、しかし何かおかしい・・・

「ハイド！いや、ファントムブラック勝負はついたはずだ！」

「ぐっ（クソこのままでは死んでしまう）た・・すけて・・くれ」

「えっ？なんで苦しそうなの、スバル君なんかした？」

「いや、何もしてない・・・」

ブラックはその時操られるようにして、苦しみながら攻撃してきた
「ロック！なんかおかしいけどやろう！　ロックバスター」
直撃だった、普通ならここで倒れる、はずだが
「（ぐっ、まずいこのままでは俺ごと爆発する）ロックマン・・・聞け、がふっ」
「なに？（おかしいぞ何か）」
とブラックは身を覆っているマントをとった、そこには時限爆弾が・・・
「こいつが・・・爆発する前に俺についてる・・電波の糸を切れ・・・」
血を吹きながらブラックは言った
「ロック電波の糸ってなに？」
『こっちの世界でいうピアノ線見てーなやつだ』
「どこを切ればいいの？」
『わかんねーよ俺は』
そんなやり取りをしてると時限爆弾爆発まで残り1分になる

「まずい！ミソラちゃん！このマンションの人を全員避難させて」

「スバル君は・・・」

「僕はこれを取り外す努力をしてみる、腐れ縁だけどこの人を見捨てれない・・・」

「スバル君・・・（何て優しい）・・わかった♪頑張って、ムチャしないでね」

『ケッ、こんなやつをなんで救わねーといけないんだよ！』

「僕にも分んないけど・・・助けを求める人がいたら救うべきじゃないのかな」

「クッ、貸しが一つできたな・・・ロックマン・・・俺の、俺の頭上を切ってくれ」

「わかった、ソード！　えい！」

電波の糸は簡単に切れた、しかしここで問題が発生する

「クソっ、この時限爆弾が取れない・・・」

『どうすんだスバル、残り３０秒切ってるぞ！』

「わかってる、・・・あっ、コードが二つある・・・これって」

『よくあるパターン！どちらかを切る・・・赤と緑か・・・』

赤いコードと緑のコードを目の前に悩むスバル

「一か八か、僕は緑を切る！！！ウォー　バトルカード　ソードファイター！」

時間は残り3秒を切っていた・・・そして緑のコードを切った

「（頼む！！まだ死ねないんだ！！！）」

『（ここでスバルを守れなかったら大吾に合わせる顔がない・・・）』

「（気絶中）」

しかし運命とは無情なものである・・・

「ピー！爆破コード切断確認、５秒後爆発します！」

「まず～い！！！どうしようロック？・・・いい人生だった」

『バッキャロウ！！！スバルー！！！死ぬな！！！』

「（気絶につき無言）」

とここでハイドから爆弾が外れた、おそらくコードを切ったからだろう・・・

「ロック・・・ありがとう今まで・・・・・・・・・・」

『スバル・・・』

人形劇の始まり始まり（後書き）

続く…

爆発の傷跡（前書き）

早く寝たい・・・これ書いたら寝る

爆発の傷跡

～ミソラ視点～

ビルのまえで祈っているミソラに最悪の光景が・・・

「ドカーン！！！ガラガラ！！！」

なんとこうすビルそのものが崩れ去ってしまった、スバルは爆心地の中心だったろう

「（スバル君ひどいよ・・・私一人残して死ぬなんて・・・）ぐすっ・・・」

『ミソラ・・・（ロックも死んじゃったわね・・・）』

そんな時マンションの住民たちはひとつの方向に指をさして叫んだ

「「「「「「ロックマンだ！！！」」」」」」

そこにはハイドを抱きかかえ帰ってくるヒーローの姿があった

「（スバル君！）ぐすっ、うっ・・・・」

ミソラはその場にへたり込んだ、スバルにもしものことがあったらと思ったからだ

「スバル君！・・・ぐすっ」

降りてきたヒーローに抱きついたミソラ、

「約束は守るよミソラちゃん、絶対に！」

『しかしスバル、よくあんな状況で頭が回ったな・・・』

～回想（爆発の瞬間）～

「ロックありがとう今まで・・・」

『えんぎでもねーこと言うな』

「いや、最後まで聞いて・・・そしてこれからも宜しく！　バトルカードスーパーバリア！」

『スバル・・・その手があったか』

「うん・・・でも、僕はダメージを少しはくらうよ」

『なんで？』

とロックが言うとスバルはバリアをハイドにかけ自分はガードした

『ムチャしやがる・・・』

～通常視点～

ロックがそのことを説明してるとスバルは電波変換が解け倒れてしまった、みると全身傷や火傷だらけだった

「スバル君！目を開けて！お願い！（いやっ、こんなお別れ・・・）」

「大丈夫だよ・・・それよりハイドは？」

『消えた・・・さっきまでいたんだがどこかへ姿をくらましたな』

「そう・・か・・・無事・・・だったみ・・たいだ・・・ね・・・」

「スバル君！！！ぐすっ、いやだよこんなの・・・」

『早く起きやがれスバル！おい！』

「ハープ！救急車を・・・いや電波変換よ、私が運ぶ！」

『わかったわ、ミソラ！』

そうしてミソラの家（マンション）は全壊、だが何とかスバルは一命を取り留めたのであった・・・

「ふふふ、こうこなくっちゃね。次はどうしよっかな？・・・響ミソラ・・・彼女を使うか・・・」

マドーラはそう言うと、ミソラの写真を見てにたつくのであった

「この貸しは必ず返すのが、私の新しい脚本かな・・・ぐっ」

ハイドは、大けがをしながら闇に消えたのだった

爆発の傷跡（後書き）

ハイドはいちちじてきにいいやつ（？）になるのかね？
マドーラは怖いっすねー
んじゃまた明日更新予定です

感想待ってるよ～（ｏｗｏ）／

奴は目覚めた・・・（前書き）

疲れた学校

奴は目覚めた・・・

～とある病院～

「・・・・・Ｚｚｚ・・・・・」

『まだ起きねーのかスバル・・・』

あれから六日もたっていた、生きてはいるのだが目を覚まさないスバル

『つったく、ハイドなんて救う意味あったのか？』

「・・・・・」

『はあ・・・返事もねーし・・・暇だな～』

～学校～

今は昼休み、ミソラはというと・・・

「ねえ、何か知ってるでしょ・・・スバル君のこと」

委員長が問い詰めるとミソラは聞こえないふりをする、しかし委員長はあきらめない

「六日も腹痛っておかしいじゃないの、それにあなたまで元気ないし」

「（ここは言うべきかな）スバル君は・・・けがしてるんだよ・・・大けが・・・」

「何があったんだよスバルに？」

ゴン太も気になるようだ、

「ミソラちゃん・・・本当のことを話して下さいよ、スバル君のこと僕たちだって心配なんですから」

キザマロも言ってくる

「大丈夫だよ・・・来週には来るって・・・」

そう言うミソラの目には光がない、これに感づかないほど委員長は甘くない、が

「（スバル君のことだし、ムチャしただけよね）まあいいわ、行くわよキザマロ、ゴン太」

何とかしのいでいたミソラ、しかしスバルが目覚めないのは心配だった

「（スバル君・・・大丈夫って言ったよね）・・・」

『（相当心配みたいね）大丈夫よミソラ』

こんな時励ますのがハープの役目

「うん・・・帰りにまた病院行ってみるね」

なんとか元気を取り戻すミソラだった

～病院～

「・・・・・（ん？ここはどこだ）ロック？いる？」

『フンッ、ようやくお目覚めか・・・』

「どれくらいたったの、あれから？」

『六日・・・心配してたぞ・・・ミソラが』

「ロックじゃないんだ！そこは心配してよ！」

急に元気になるロック&スバルコンビ

「でも心配かけたな、メールしとこ・・・今何時？」

『ざっと、1時だな・・・学校は昼休みの時間じゃねーか』

「それなら電話しよ！　ブラウズ」

～学校屋上～

「ふう！ここは気持ちーね」

中学校にも屋上があり、小学校より大きく芝生が生えている

『ミソラ電話よ、誰かしら？』

「ん？えっ、スバル君？　ブラウズ！」

映ったスバルの顔は凄く久しぶりだった

「ごめんミソラちゃん、心配かけて」

「ほんっっっと！心配したんだから・・・もうムチャしないで・・・」

「うん（ミソラちゃんを守るためならまたしちゃうな・・・）」

「学校終わったらそっちに行くから♪」

『ミソラ、今日からずっとドラマの撮影よ』

「うーっ・・・ごめんスバル君・・・」

「いいよ、気にしないで」

「（なんて優しい）委員長たちは行くと思うから、私は今度ね♪」

「うん！んじゃ、頑張ってね」

～放課後・病院～

「スバル君、心配したじゃないの・・・何があったの？」

「おいスバル、何があったんだ？」

「スバル君、僕も心配してたんですよ・・・」

「みんな・・・（みんな心配してくれてたんだ・・・）」

そして、スバルはみんなに説明をして、そのあとは学校のことなどで話し込んだ

「そう言えばスバル君、来週は体育祭よ・・・あなたにも出番はあるからね」

「もうそんな時期か・・・」

そう言ったスバルに対し、三人はニヤニヤしている

「（なんだろ？）」

そんな時、

「ガチャ！ふう、スバル君！来ちゃった♪」

ミソラが駆け込んできた、そして「てへっ」とやっている

「うっ・・・（可愛い）」

「それじゃあみんな揃ったところで帰りましょう」

5人は帰ることに、ちなみにスバルはもう傷が治り、退院できる状態だった

～帰宅時・コダマタウン～

「それじゃあ、みんな月曜日ね、遅刻しないでね」
「ゴン太君行きましょうか、スバル君、ミソラちゃんさようなら」
「おう、スバル、ミソラちゃん、じゃあな」
「あれ・・・ミソラちゃんベイサイドシティに行かないの？」
「マンション壊れたし・・・」
「じゃあ、どこ住むの？」
というと急に、ミソラは笑顔になって
「ついてきて、びっくりするから♪」
「（なんだろ？）」
と、ミソラに引っ張られて進むとだんだんスバルの家が近づく
「（まさか！？）」
スバルの脳内はある一つの考えへ・・・
「ここが私の家♪よろしくねスバル君」
「えええええっっっっ！！！ほんとに？」
「ほんとだよ♪ビルが爆発してから居させてもらってるよ」

「（まじかいな）そうなの・・・じゃあ入ろうか」

「うん♪」

内心は嬉しいスバルであった

奴は目覚めた・・・（後書き）

変なとこで切ってすんません
一回サブタイトル打ってなくてやり直した・・・
疲労困憊だわ

感想待ってます・・・
あと、良い文章のアドバイスも！

来週までに・・・（前書き）

学校が冬休みになるまで、一日一話ペースかも、すみません
さらに駄文・・・救いようがない作者
見てくれてる人に感謝です

来週までに・・・

～スバルの部屋～

「・・・・・はあ・・・・・・」

スバルは思うのだった・・・無理と

「（来週までに・・・って無理すぎるよ）」

なぜスバルこんな感じかというと・・・

～1時間前・スバルの家・夜ご飯の時間～

「「「いただきま～す」」」

スバル家にミソラが加わり、夕食時の話も盛り上がった

「スバル、ミソラとどうなのよ？」

照れるスバル、まだこの時は退院から間もなくテンションも高かった

「別に・・・（母さんなんでめっちゃ嬉しそうに聞いてくんの？）」

まあ、あかねもスバルいじりはこのくらいにしといて、話題が変わる

「そう言えばスバル、ミソラ、来週の体育祭絶対見に行くからね」

「私も頑張るぞ♪あ、そう言えばスバル君に伝えてなかった・・・」

体育祭、スバルが苦手とする行事、休みたいそう思っていた

「なに？伝えてなかったことって？」

スバルは油断してた・・・体育祭はすでに休めないことになっていたことを・・・

「う～んとさ・・・スバル君の出る種目がね・・・」

ミソラは言いずらそうにしてる、いやな予感がするスバルは問い詰める

「僕の出る種目って何？２００ｍ走は全員じゃないっけ？他にあるの？」

ここでミソラは、こっちを見た、笑いながら

「スバル君の出る種目・・・全部だよ」

スバルは理解できなかった、ミソラは続ける

「出れる競技全部エントリーされてるから、頑張ってね♪」

スバルの時が止まった、スバルの脳内は激しくそのことを理解しようとした

「えええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！」

理解しようとしたが理解できず叫んでしまう

「私も張り切って弁当作るわ、ミソラも手伝ってくれる？」

「はい、スバル君楽しみにしてて♪」

スバル以外の人で着々と準備が進められる

「まってよ、全部ってうそでしょっ！なんでぼくがっ！」

「なんでって・・・」

予想はついていた、ルナ＆ミソラの独断による決定！＆世界を救ったヒーローというレッテルからのみんなの賛成・・・

「（最悪だ・・・）」

「あ、あとこの競技・・・マラソン、これ一位取ってね♪」

「はい・・・（もうどうにでもなれ）」

「一位の景品が、旅行券なんだよ、絶対取ってね♪」

ミソラの願いを叶えるために狩りだされるスバル、一応世界を救った英雄なんだよ

そして現在にいたる、

「はあ、明日からはマラソンの練習か・・・」

『くっく、残念だなスバル』

ちなみに、ミソラはドラマの撮影のため練習には来れないらしい、本番は無理してでも来るといっていた

「しかたない、頑張ろう！ロック」

決意するスバルであった

来週までに・・・（後書き）

また明日
感想待ってるよ

地獄の一週間（前書き）

昨日はすみません
&明日テストって最悪・・・

地獄の一週間

～一日目・日曜日～

ということでマラソンで一位をとるため、練習が始まった、が

「さて何をすればいいんだ？」

マラソンに出ることを決めたものの、運動なんてあんましないスバル・・・

「そう思って助っ人を読んだわ」

さすがは委員長手際がよろしいこと

「助っ人って？」

と、ここで現れたのが・・・

「ツカサ君！何でここへ？」

「スバル君、久しぶり・・・なんとか、旅は終わったよ」

双葉ツカサ、昔ＦＭ星人のジェミニと電波変換してジェミニ・スパークとなりスバルを苦しめた、多重人格を持っており「ヒカル」という名だった。

「そうか・・・ヒカルはどうなったの？」

「ウィザードとして、今は僕の助けになってくれるよ」

『おいツカサ呼んだか？』

「あいさつしなよ、ヒカル」

『わかった、スバル久しぶりに聞く名だな・・・お前が助けをツカサに求めりゃ俺たちが助けてやるから覚悟しとけ！』

まだ戦闘が好きで荒っぽいのは治ってないようだ

「ちょっと！二人とも私のことを忘れないでよ！練習のために集まったんだから・・・走ってきなさい」

「委員長、何でツカサ君が助っ人なの？」

「なぜって・・・あなたに並ぶ我がクラスのエースだからよ」

『エースだってよ、ツカサ』

「そんなこと言われても・・・僕、陸上部ではないんだし」

結果を言ってしまうと、スバルのクラスにはずば抜けて早い人がいなかったため、マラソンに出る選手を決める際、まあまあ早くてカッコイイという理由でツカサ、ロックマンという肩書でスバルが選ばれたというわけだ（マラソンメンバーは全部で5人だが残りの3人は捨て駒）

「それじゃあスバル君、走ってこよう！」

「まって！・・・ツカサ君、その・・・ぼくとブラザーバンドを結んで下さい」

「いいよ、僕みたいな人でよければ（これで僕の罪が消えるわけじゃないだろうな）」

というわけで一日目はツカサとともに、（鬼）コーチの委員長の下、ぐんぐんタイムを上げて（地獄のような特訓の成果）終えたのであった・・・

～その夜・スバル～

家に帰ったスバル

「あれ？ミソラちゃんは？」

「昨日の夜からドラマの撮影が本格的に始まるから、撮影地のホテルに寝泊まりするって」

「へえ、そうなんだ（そういえば家にいなかった）」

「あれっ、スバルはミソラがいなくてさみしいのかな？」

「ちっ違うよ」

顔を真っ赤にするスバル、これではスバルがそう思ってなくても肯定してるようなものだ

「ふふふふっ、そうなんだ若いわねスバル」

「違うって！」

さらに真っ赤に、ロックがさらに追撃する

『さみしくないって言ってたってミソラに言っちゃおうかな』

スバルに逃げ場がなくなる

「・・・さみしいです（何でこんな恥ずかしい目に）」

そんなスバルだった、一方のミソラはというと

「ふう・・・つかれた・・・」

ドラマの撮影の今日の分は無事終了したところだった、とここで

「ミソラちゃん、今日の縁起上手かったよ」

「はい、有難うございます・・・って、あなたは誰ですか？」

そこにいたのは、見たことがないがすごくイケメンの役者だった

「あ、すまねーな　自己紹介が遅れた、うんん・・・俺は　切咲絆　（きりさき　きずな）今日からロケ入りした、このドラマの主役で、君の恋人役さ。」

「あ、はい、宜しくお願いします（雰囲気がスバル君に似てる・・・なんでだろ？）」

「はははっ、おう、宜しくな！それじゃっ今日はここまでで・・・

それとも一緒に食事でも行くか？」

年齢的には高校生ぐらいだろうとミソラおもった、魅力的だが、ミソラはスバル意外見えていない

「済みません・・・これから用事があるので」

「そっか、まあ今度な。それじゃ何かあったらメールしてくれ」

「さようなら絆さん♪」

『（あの人のオーラがすごい・・・なんだろ）』

そして帰った絆だった

～闇の組織～

「ブラック、マドーラが見当たらん・・・やつはどこに行った？」

やけに焦っていた、それもそのはず、ハイドとともに主力の一人が来ないのだから

「ふっ、大丈夫だ、やつは電波変換できんからロックマンにやられることはない」

やけに安心しているブラック、さすがはボスというところ

「やつは目的を果たすまで帰ってこないだろう」

「ハイドとやらは？裏切りもあり得ます・・・」

「っふっふ・・・大丈夫だ、心配いらない」

「しかし・・・」

「トートよ、やつの冷酷さはお前も十分わかっておろう・・・あんなあいつが、甘ったるいロックマンにやられるとでも？俺は絶対ないと思っている、お前も焦っていたら足をすくわれるぞ」

「はっ！了解です・・・（まだ心配が残るが・・・）」

トートは、何かの作業でコンピューターの元へ、ブラックはいすにどかっと座り一人考えていた

「（しかし、何故マドーラは自ら動くと言ったのだ・・・やつの性格からいって、人を使うと思っていたのだが）」

～練習二日目～

【こっからはだいぶ短縮します】

「はい今日は、スバル君、野球部のようにタイヤを引きながらツカサ君のスピードについて行って」

「鬼！？」

「（キッ！）やるわよね・・・」

「（オーラがこわいよ）はい・・・」

そういうことで、スバルは死にかけるぐらい全力で走って、練習二日目終了

～三日目～

「スバル君、今日はタイヤふたっつね」

と、笑顔で言うルナのオーラは、スバルの意見を認めない雰囲気

「はい・・・」

「（スバル君も苦労してるんだね）」

『（そうだな、ツカサ）』

また今日も地獄を乗り越えたスバルしかし・・・

～四日目～

「今日はタイヤ５個」

～五日目～

「今日はツカサ君の二倍の距離でタイヤ三つ」

～六日目～

「さあスバル君、明日は最終トレーニングだけでいいから今日は４２．１９５キロ走ろうか？」

「ははああいい」

スバルはもはや死人のごとく返事もままならない、しかし確かに力をつけてきている

・・・・・・そして・・・・・・・

「ぐは～、ゴールした・・・タイムは？」

「４時間と１０分・・・一位には程遠いわよ」

「ツカサ君は？」

「３時間３９分、差がすごいあるけど・・・どうしてくれる？」

「はあ・・・明日の調整で何とかするよ」

というわけで（後半カットしすぎやろ）スバルの地獄は終了した

～最終日～

最終日は軽く走って、ストレッチをした、夕食はカツをたべて気合を入れた

「しかしスバル、一週間でたくましくなったな」

「父さん、そんなに？」

「ええ、すごくたくましくなったわよね大吾さん」

「ああ、スバル、後は自分を信じて頑張れな」

「うん！」

なぜかスバルは、自信がついていた、実は昨日ツカサとのレースはだいぶ手を抜いていたのだ、更に疲労が回復したのを考えれば3時間半を切ったタイムを出せる、そう考えていた

「あ、メールだ」

〜スバル君、明日は決戦だね♪私も練習に付き合いたかったけどごめんね・・・スバル君が一位で帰ってくるのを信じてるからね〜

「ミソラちゃん・・・」

『へっ、これで一位を取れなかったら・・・恐ろしいだろうな』

「だいじょうぶ、っていっても・・・無理があるか？」

『でも俺まで練習に付き合わせたんだから勝てよ』

「ロックは負けず嫌いだからなあ、これも負けたくないんでしょ」

『おっ俺は関係ねーよ、お前の問題だろ』

スバルは思う、これも、このマラソンも自分だけじゃここまで来れなかったと、みんながいたから、つらくても頑張れたんだなあと

「よし、まだ八時だけど寝よう、おやすみ！」

『おう』

眠りに入ったスバルだった

地獄の一週間（後書き）

今日はここまで
感想送ってください

マドーラの一計（前書き）

今日もこれしか更新できないです・・・

マドーラの一計

～闇の組織～

「ックック、ハイドよ、失敗に終わったなこの前は・・・」

ここはブラック達がいる場所ではなく、マドーラが居座るノイズウェーブ

「はっ、まさか私を見ごとにあすけるとは、マドーラ様の脚本どおりにはいきませんでしたね」

「ふ、まさかあの爆弾を解いて見せるとは・・・」

～回想・マンション爆破の前のくだり～

見苦しいなハイドよ」

ローブをはおり、十字架の仮面の男は言った

「なっ、マドーラ・・・様、なぜここへ」

「おい、俺の取ってこいといった品は・・・」

「（まずい忘れてた・・・くそっ）次は必ず取って「バン！」」

「お前は用済み・・・でもまだ使えるな」

というとマドーラという男はハイドの髪を一本ぬきとった

「ぐっ、何をする」

「ふっ、人形劇を始めるだけだよハイド君・・・」

男はほほ笑んだそして、糸のようなものを巧みに動かしていく

「まっまさか、それは・・・」

「そうさ、これは＜電波の糸＞私が発明した、電波変換したものを操れる」

「私に何をさせるつもりで？」

そう聞くハイドに瓶に入った液体を見せる

「それは？」

「ふふふ、私の発明品、これで死んだ電波をよみがえらせれる・・・」

仮面の下で不気味な笑みを浮かべるマドーラ

「それで、何をすればよろしいのです？」

「なんてことはない、この爆弾で自爆・・・やつを道ずれにしてな」

「なっ・・・」

ハイドはたじろぐ、自分に死ねと言っているのだから

「自爆して奴が消えたらお前をよみがえらせる、これでお前の汚名返上だ」

「（この作戦でロックマンに復讐できる）わかりました、このハイド、あなたの脚本に出演して見せましょう！」

「ふ、そうだ条件を付けておく、ロックマンには命乞いしろ。あと、貸しができたって言っておけ」

「はい？なぜ・・・いやいいです（この人の言うことには意味があるのだろう）」

というと声のトーンを上げて

「別に失敗してもいいから、アドリブはあまりするな」

「はっ、では」

と動こうとするハイドだが、電波の糸で動けない

「動けません・・・」

「わかった行ってこい」

ハイドは無理矢理操られ電波変換させられる、そして、人形劇の人形のようにぎこちなくミソラの部屋へ向かわされて行った・・・

～闇の組織・マドーラの間～

「しかし、なぜあんなことを？」

少し、声を上ずらせて聞くハイドに冷静にマドーラは答える

「ふふふっ、この後の計画、お前が言う脚本にかかわってくる」

ここでハイドには疑問が

「その・・・計画とはブラック様のものと違うのです？」

「ははは！奴に俺が従うとでも、俺はやつより上だ・・・簡単にデリートできる、しかしやつと協力という名目で奴を駒として使えば、・・・私の望む力が得られる」

ハイドは思った、この人・・・マドーラに会ったときに感じたこいつのオーラがすさまじいものだったのを、そして、今もそのオーラで気絶しそうなくらいだ

「まあ、マドーラ様に私はついて行くだけです・・・」

「ふふっ、次は何をしようかな・・・」

二人は闇に消えた・・・

マドーラの一計（後書き）

感想よろしく

目指せ一位！体育祭！～本番直前まで～（前書き）

体育祭編（戦闘なし）長くなりそう・・・

このペースだと１００話超えてしまうかも

まあ、どんどん進めたいですわ！

目指せ一位！体育祭！～本番直前まで～

～当日～

早く寝たため早く起きたスバル、と

「（う～ん、よく寝たかな？）ふああ・・・」

『Ｚｚｚ・・・』

「Ｚｚｚ・・・もうパフェ食べれないよスバル君・・・」

『（あらスバル君の起きたのね、ふふふっでも寝たふりしとこ）』

早く起きてしまった・・・とここで気づく

「（何でミソラちゃんがぼくのベットに入ってるんだあああああああ！！！！！）」

一人パニックになるスバル

「Ｚｚｚ　むにゃむにゃ・・・」

一方のミソラはスバルに抱きつく

「（寝てるとはいえ、これはいけない！！！）ちょっと・・・」

しかし、ミソラのかわいい寝顔を見ていると起こす気がなくなる

考えれば一週間ぶりの再会だ

「・・・かわいい・・・」

『クスッ、ミソラが起きてれば嬉しがってただろうな♪』

「ハープは起きてたのか、恥ずかしいな」

「・・・・・Ｚｚｚ・・・・・」

顔が赤くなるスバル、しかしおかしいのはミソラも顔が赤くなってるところだ

「・・・ミソラちゃん、もしかして・・・起きてるよね？」

「・・・・・」

『Ｚｚｚ、ガー！ゴー！』

ロックのいびきで静寂は無くなった、これでは雰囲気が・・・

『寝てまでＧＫＹ（ガサツ＆空気読めない）なの！』

気持ちよく寝ていたロックに、こちらも気持ち良いくらいのジャブからのアッパーを決めるハープ

『グフッ・・・（気絶）』

『それじゃあね、二人とも♪』

ハープはロックを連れていずこへと消える

「・・・・Ｚｚｚ・・・・・」

「な～んだ、起きてないなら聞こえてなかったんだな・・・おやすみミソラちゃん」

わざとオーバーリアクションをとって二度寝するふりをしたスバル、ミソラもこの罠には気づかずに

「・・・ねてる？・・・・かな」

「はあ・・・寝てないよ」

「わっ、寝たふり！」

「ミソラちゃんいつから起きてたの？」

「パフェの寝ごとのくだりから♪」

「って最初からじゃん！」

ミソラの演技に、まんまとはまっていたことと、かわいいって思わず言ったのを聞かれたことが恥ずかしいスバル

「ちょ、そろそろ離れて」

さっきから抱かれ続けているのもスバルが照れる要因だ

「私のこと嫌いなの？」

涙目（演技）でいわれるとスバルに勝つすべはない

「・・・嫌いじゃないよ、好きだよ」

「じゃあ、いいよね♪」

というわけでかれこれ一時間抱かれ続けたスバルだった

～朝食～

「スバルご飯よ！ミソラもいるんでしょ」

スバルが解放されたのは母の一言だった

「それじゃあいくか、ミソラちゃん」

「うん♪あ、そういえば弁当、スバル君が起きる前にお母さんと一緒に私作ったんだ、楽しみにしててね♪」

スバルは嫌いだった体育祭の楽しみが増えた

「おはよう母さん、あれ父さんは？」

時刻は朝４時、ものすっごく早おきな家族だ

「大吾さん、長官に一週間前からすごく頼み込んで、やっともらえた休みだからって張り切ってもう学校の校庭で待機してるみたい」

「ははははっ、（父さんのことだからゴール前の一番いい席に待機してるんだろうな）」

ミソラもここで着替えて降りてきた

「おはようございます、スバル君、後で少し外走ってこない？練習に一回も付き合えなかったし（マラソンにスバル君が出るきっかけを作ったのは私だしね♪）」

「いいよ！じゃ、ごはん食べるか、いただきます！」

「「いただきます」」

と、ここでウィザードコンビが帰ってきた

『だから、何でアッパーする必要があったんだ！』

『さっきも言ったとおりね・・・』

まるで漫才をやってるかのごとき夫婦喧嘩は、スバルとミソラの説得により終了し、その漫才をあかねは面白そうに見ていた

「もぐもぐ、がぶっ、ゴクン！それじゃあ、着替えてくるから待っててミソラちゃん」

「は～い」

あかねはミソラが一人になったので突っ込んだ質問をする

「昨日は一緒に寝たの？」

「え、あ、・・・はい」

「ふふふっ、頑張ってねミソラ。気を抜くと誰かに取られちゃうかもよ、スバル以外と持てるみたいだし」

そうなのである、意外と顔が整っているスバルは最近は明るく、人気者のため自然と人が集まってくる、昔のスバルとは大違いだ。しかも、欠点だったもやしっ子としてのスバルはこの一週間でたくましく筋肉モリモリのまさに〔漢〕となったのだ。これからスバルの争奪戦・・・女子による戦国時代が始まることはミソラだって目に見えている。

「私、スバル君をほかの人に取られないように頑張ります！」

ミソラは真剣に決意表明した

「スバルも、こんなかわいい女の子に想われて、幸せ者ね」

そんなことをしてるときが得たスバルが降りてきた

「どうしたのミソラちゃん、母さんも？」

なにも知らないスバル、

「あれ？スバル君いつもの服じゃないの？」

よく見ると、青に白いラインが入ったウインドブレーカーを着こんでいた

「うん、やっぱり運動するにはこのほうがいいかと思って・・・似合ってるかな？」

「うん！すごくいいよ♪」

照れるスバル、まあトップアイドルにこんなセリフを言われて心踊らないものなんてめったにいないだろう

「ミソラのもあるから、着ていったらいいわ」

そこにはスバルの色違いでピンクのウインドブレーカーがあった

「えっ！ありがとうございます（スバル君とおそろだ）」

というわけでミソラが着替え終わって出掛ける二人だった、あかねが見たその背中はまるで夫婦のようだったという

「（ふふふっ、あの二人もだんだんおとなへと言う名の階段を駆け足で上っているのね）」

妙にうれしそうなあかねだったという

～コダマタウン～

「スバル君、ペース早いね」

「うん、この一週間、（悪魔のコーチのもと地獄のような）特訓に励んできたからね」

というスバルは、昔の運動音痴のスバルとは思えないくらい素晴らしすぎるフォームで走っていた

「ミソラちゃんのドラマはどうなの？」

「順調だよ、すごく出演者の人とか、プロデューサーさんが優しくて。和やかなムードだよ♪」

このドラマというのが、春のスペシャルドラマで3夜連続で放送されるドラマであり、製作費は映画並みだといわれている

「ふう、ミソラちゃんつかれた？」

「全然だよ（ちょっと限界かも・・・でも我慢しよ）」

「そう言って、演技でしょ。ミソラちゃんの競技もあるから、ここら辺でやめるか」

「うん（スバル君、演技を見破るのがうまくなってきてる）」

といって、一度家に帰ったスバルとミソラだった

～時刻7時半～

家を出るには早い時間だが、今日は体育祭ということもあって、この時間に家を出ることに

「そういえばミソラちゃん、ミソラちゃんがぼくのうちに住んでるって委員長たち知らないんだよね」

「そうだね♪別にいいじゃん、さあ、行こう」

「（いや、僕が血祭りにあげられる・・・）うん・・・」

今日は、委員長グループの迎えが来なくてスバルは死なないで済んだが、これからのことが心配になるスバルだった

～学校・校庭～

「結構本格的・・・ってか、オリンピック並？」

なぜか、超本格的なスタジアムみたいなのをグラウンドに設置している

「（学校の財力がすさまじい・・・）」

驚くスバルと、知っていたかの如く意外と普通のミソラ

「それじゃあ、席に行こう♪」

因みに、スバル達の組は青組、ほかに赤、白、黄、緑があり全部で5クラスで優勝を競う！

「えへへ、スバル君と隣の席なんだよ♪」

ミソラの席は前列の右端から2番目で、端がスバル。もちろんこれはくじで決める際にハープに頼んで教えてもらったのだが

「そうなんだ・・・ってか、僕だけ応援とか、クラスの団体種目の練習参加してないんだけど・・・」

そうなのである。スバルはこの一週間、走ることだけをやらされてきた・・・そのため、応援合戦や、団体競技のムカデ競走などは

練習に参加してない。

「大丈夫、私もやってないから（驚くんだろうな・・・スバルくん目立つの嫌いだし）」

何かを企んでそうなミソラ、いつものこと（？）だ

「あら、スバル君早かったのね」

「おっす、牛丼パワー全開だぜ！」

「スバル君、競技の情報や計算なら、僕のペディアに任せてください」

三人が一気にきて、更に話が盛り上がっていると、もう開始直前となってしまった

「スバル君、おはよう。今日は一緒に頑張ろうね」

ツカサも登場し、だいたい青組みのメンバーがそろう

「そういえばミソラちゃん、僕の出る競技って何個あるの？」

「え～と・・・」

はい！ここで競技紹介、（スバルが出るのは（ス））

１種目目・男子２００ｍ走　（ス）

２種目目・女子１００ｍ走

３種目目・綱引き　（ス）

４種目目・障害物走　（ス）

５種目目・ウィザード競技？
６種目目・応援合戦　（ス）

～昼食～

７種目目・レクリエーション競技　（ス）
８種目目・ムカデ競走　（ス）
９種目目・マラソン　（ス）
１０種目目・クラス全員リレー　（ス）

「って、後半休みなし！死んじゃうよ・・・」

「大丈夫だよ♪頑張ってね」

スバルの叫びもむなしく、もう後戻りはできない・・・

『ウィザードもでるのがあるみたいだな』

『ドッヂボールをやるらしいわ』

『フンッ、俺のロケットナックルで敵を粉砕してやる』

いや、ヒカル君・・・それは反則だよ

『俺も腕が鳴るぜ・・・』

『でるのは私とジェミニとＭｒガサツとオックスだったわよね』

全員宇宙人って卑怯な采配

『ブロロロロ！！！絶対勝つぜ！！！！』

なんかめっちゃ団結するウィザード（宇宙人）たちであった

目指せ一位！体育祭！～本番直前まで～（後書き）

感想よろしく

炎の体育祭・前編（前書き）

クリスマスおわったね

炎の体育祭・前編

～開祭式～

「えー、このたびは、この晴天の下・・・・・・」

体育祭の中で一番つらい種目といえば校長の挨拶ですよね・・・

「えーですから、ねっ！えー・・・・・・」

『（アァァァァ！！！！！はよ終わらんかい！！！）』

「ロック、騒がないで・・・しんどいのも分かるけど」

まだ初夏とはいえ、この時間ほどしんどいものはない

「これにて、私の挨拶とします・・・えー、生徒の皆さん・・・」

はあ、そろそろ限界・・・スタートから３０分、熱中症の疑いの生徒が数人出てきたところでようやく終わった・・・

「ロック、大丈夫？」

なぜか電波のロックもへたり気味。

『・・・スバルは何でそんな元気なんだ、あんなつまらん話聞いて具合悪くなんない方がおかしいだろ・・・』

なんでスバルが元気かというと、緊張してるのと、嫌いだった運

動会（中学では体育祭ね）なのにテンションが高くなっていたからだ

「ただいまより、体育祭の第一競技から始めます」

『スバルの出番か？』

スバルの席と、ミソラの席を使って寝始めるロック

「うん、それじゃあゆっくり休んでて（あれ？ミソラちゃんは？）」

『・・・うう、頑張ってこい』

電波のくせに、熱中症患者のごとく第一種目から休むロックだった

「えーっと、男子２００ｍ走の出場選手のひとは、本部前スタート地点に集まって下さい♪あっ、今日の放送を務めさせてもらう響ミソラで～す♪よろしくね」

ミソラが司会ってテレビかっ、というぐらい豪華である。まあＴＶ取材もちらほらいるのもそのためなのか

「本部前ってここだっけ？ツカサ君」

スバルはツカサと行動していた。まあ、一週間もマラソンの練習で一緒にいれば、昔のことなんか忘れて仲良くなるものだ

「ここ・・・だよね、ヒカル」

『ん？ここだぜ』

ぞろぞろと各組の選手が集まってくる

「スバル君、ツカサ君、頑張りましょうね」

「おっす、スバル俺が一位取れない分、お前がとれよ」

戦力外の二人（キザマロ&ゴン太）彼らには期待できない

「ああ、スバル君頑張ろうね」

「うん（一位取らないと委員長に殺されるだろうし）」

待機時間も終わり、第一種目スタート時間へ

「位置に着いて♪よーい・・・バン！」

スターターまでミソラはこなす、

「続いて二組目です（キザマロ君、頑張ってね♪）」

「（がんばります）」

ミソラの応援に答えたのか、キザマロはびりを免れる

「（次はゴン太君ですね、僕のガッツ受け継いで下さい）」

「よーい、バン！」

ゴン太は、堂々の・・・びり。さすがである

「くそー、すまねー。オックス・ファイアーになれば一位取れたんだがな・・・」

「いやっ、反則ですよ」

「ゴン太、キザマロ！なによあの不甲斐ないレース！」

「ぼくもですかっ！一応びりじゃないですよ」

びりじゃなくても怒られるキザマロ、ゴン太はしゃーない

「連帯責任よ、レ・ン・タ・イ・セ・キ・ニ・ン！！！」

「でもよ、委員長・・・俺たちには無理だぜ」

ここで委員長はひらめいたように

「それじゃあ、こうしましょ・・・スバル君が一位をとったら、連帯責任だからプラマイゼロで罰はなし、いいわね！」

「（スバル君頼みますよ）」

「（スバル、頼んだ）」

裏でこんなことがあるとは知らずスバルの番は迫る・・・

「（次か・・・緊張する）」

ちなみに、ツカサは一位を死守。さすがである

「（よし、行くぞ）」

「（スバル君ファイトだよ♪）」

スバルにミソラがウインクしたのは、ここだけの話。ばれれば芸能ニュースものだ

「位置について・・・よーい、バン！！」

スタート、早くも出遅れるスバル。

「（くそ～、無理か）」

とここで殺気、もちろん委員長。

「（一位じゃなかったら、この二人もろともどうなるか分かってるんでしょうね）」

「「（スバル（君）助けて！）」」

まさに鬼、これによってスバルはマッハを超えるくらいの、高速で追い上げた

「（うおおおおおおおおお、負けるかあああああああああああああ！！！！！）」

そしてゴール、ギリギリ一位

「（ふう、なんとか死なずに済みました）」

「（危なかったぜスバル）」

こうして、この種目を終えたのだが・・・

「お疲れスバル君、あれ・・・生きてる？大丈夫？」

ミソラが声をかけても、放心状態だったとさ。

【またこっから短縮で】

第２種目、スバルはおやすみ。

「（よーーーし♪行くよっ！）」

ミソラは何とか２位につける、委員長はというと

「（負けてたまるものですか）」

こちらは負けず嫌いのパワーで一位を勝ち取って、チームに貢献。

しかし、クラス全体としては４位と微妙な位置・・・

第３種目、綱引き

「うおおおおお、スバルいこうぜえええ！！！」

ここにきてゴン太の本領発揮、綱引き優勝を果たしてクラスとしても一位に浮上

「（もう死にそう・・・）」

スバルの体力は、結果に反比例するように低下していったとさ・・・

「第４種目は、障害物走、借り人＆ウィザード競争で～す♪」

２連投のスバル、死足その裏でこのに競技・・・ある闇の計画が動いていた・・・

ことの発端は、この競技を委員長が発案したときにのぼる

～学活の時間～

「えーっと、企画会でこんな競技をやることになりました」

黒板には、＜借り人競走＞と書いてある

「そこで、このクラス（委員長のクラス）に、借りる人や物の案を出してもらうことになりました」

スバルはこのとき、一人トレーニング中。だから何も知らない

「（なにかこっかな～♪そうだ！スバル君この種目でるんだよな・・・これをつかって）」

とミソラが書いたのは＜アイドルをだっこしながら走る＞というものだった

「委員長、こんなのどう？」

ミソラの頭にあることがわからないほど委員長も甘くはない

「だめね！絶対に！」

とここでミソラにいい考えが

「じゃあ、＜金髪か、ショートカットの女の子をだっこして走る＞はどう？」

これはつまり、委員長ｏｒミソラになってしまう・・・

「いいわ（望むところよ・・・負けないんだから！）」

「（スバル君ならきっと・・・）じゃあ決定ね♪」

こんな闘いがあったことを知らないスバル。二股をかけるわけにもいかないためここでしっかりと蹴りをつけなくては・・・

～現在・通常視点～

「「（負けられない・・・）」」

絶対に負けられない戦いはここにもある、女の関ヶ原！いざ出陣！！！

「それじゃあいってくるね（何でミソラちゃんと委員長が張り切ってるんだ）」

という疑問を残し、スバルは出陣した。

ここでこの競技の、ルート説明。まずはスタートから５０ｍ普通に走る、次にくじを引いてクイズに答えて進む。そして、もう一度くじを引いて、借りものをする（ここは物）そして最後、コースに５個ある板のうち一つをめくって、お題のことをやって（借り人）をしてゴール！

「（よし、次だ。行くよロック）」

『おう』

ちなみにこの競技は、ウィザードの参加がありのため。ロックも参加

「位置について、よーい、バンっ！！！」

関ヶ原は始まった・・・と、お気づきだろうか？これで、スバルがあのカードを選ばなかった場合のことを・・・

そして案の定、スバルはやってしまうのだ・・・

「まずは、クイズ！」

「問題、太陽系のうち、もっとも太陽に近い「水星！」」

天体のクイズなど、最後まで聞かなくてもスバルにとっては赤子の手をひねるようなもの

『やるな、さすがは天体マニア』

スバルはぶっちぎりの1位、次は・・・

「えーと、カメラを借りる・・・父さん！よこして」

ダッシュで父親の手からカメラをとってさらに加速！そして魔のゾーン・・・

ちなみに、あのカードは一番インコース。普通1位なのだからそこをとるが・・・

「（うっ、あのカードはやばい気がする）」

なんというか、危機管理能力がスバルにあるのか、あのカードの魔力が強すぎるのか、スバルは急カーブして回避！

「えーっと、なになに？」

しかし運命か？大変なカードを踏んでしまう

＜クラスの委員長と、女子1名を背負ってゴールへ行く＞

「（えええええええええええええええええええっ！！）」

ちなみにこのカードを作ったのは・・・ウォーロックなのだ！

『おっ、一番面白いの選んだな、早く委員長とミソラ背負ってゴールしろよ』

「・・・時間が無い、行こう」

ある意味、これはこれでよかったんじゃないのってな感じで、関ヶ原は決着を迎える

「（スバル君って、奇跡の起こすんだね）」

「（決着はまた今度ね）」

二人を大工のように背負って1位でゴールして、一件落着であった・・・

（ちなみに、裏でロックがハープに殺されてたのは別の話）

第五種目　ウィザード競技

これはドッヂボールね、んで宇宙人チーム（ロック、ハープ、オックス、ジェミニ）余裕で決勝まで勝ち上がるわけで

『こりゃ、余裕で一位だな』

『ブロロロロ！おおおおお』

『なんで、ジェミニは今日ヒカルじゃないの？』

『バカ野郎、ＦＭ王の右腕とも言われた俺が、ヒカルと分離できないとでも。今回はウィザードだけだから電波変換した姿は反則かと思ってやめといただけだ』

とここで強敵が・・・

『おうおう、決勝はやはりお前たちか？』

現れたのは、コーヴァス、ヴァルゴ、アシッド、キグナスの面々

『てめーら！特にアシッド、ゴラアァ！！』

素振りを始めるロック、

『でも、あなたたちって個々の生徒のウィザードじゃないんじゃないの？』

『そっそれは・・・』

ハープの質問に、たじろぐコーヴァス

『キャハハハ、ジャックが力を貸してって言うからでただけよ』

ジャック？そういえば、スバルのクラスにいなかったね・・・

「試合開始！」

始まって早々、キグナスはロックに、オックスはアシッドに秒殺される

『『グフッ、すまねー（すみません）』』

ちなみに、ハープとヴァルゴは外野スタートなので実質残り二人

『アシッド、決めやがれ』

『ロック、後ろさがって回避しろ』

見事な協力プレーで乗り切ろうとするが

『ガッ、すまねーな。ロック任した』

ジェミニがアシッドに当てられピンチ・・・

そのころ、スバル達は

「「「「ジャック！！」」」」

「久しぶりだな、スバルに委員長、ゴン太、キザマロ」

「この学校に来てたんだ・・・」

「ああ、おっ、ツカサじゃねーか。」

「ジャック君、赤組だっけ・・・今日のマラソン負けないよ」

なぜか仲が良い二人（ツカサ&ジャック）

「なんで、ツカサ君が知ってるの」

「ああ、えーとさ。言ってなかったけど僕もサテラポリス遊撃隊に入ってるんだよね。」

「そーなの・・・知らなかった」

「俺もだぜ、あと、ねーちゃんも」

「ジャックも！」

ツカサとジャック、クインティアも加わり戦力は増大した遊撃隊。
「それで、家がぼくたち無くて、サテラポリスの宿舎で一緒の部屋になったから、もう友達ってわけ」
「ツカサにいっつも勝負挑むんだけどな・・・」
どうやら、ジャックは勝負を挑んで負けているようだ
「じゃあ、俺は戻るから。また昼食の時来るよ」
「「「「じゃあね」」」」

んで、ロックたちに話を戻すと
『ヤベーな、さすがに』
ロック一人ｖｓアシッド、コーヴァス
『とりあえずハープにボール預けるわ』
ハープにパス、すると
『えいっ』
ハープの投げたボールがコーヴァスにヒット、更にまたハープにボールが
『おい、ハープ！その殺人ショットで決めちまえ！』

ロックが失言をしてしまう・・・もちろん

『えいっ！あ、ついロックにやっちゃった』

殺人ショットでロックは気絶、アシッドは当ててていいのか分からないが、とりあえず優しくぽんと当ててておいて勝利！ロックたちは2位に終わった・・・

炎の体育祭・前編（後書き）

gdgdな文章かも・・・

感想、一言、アドバイスまってます

炎の体育祭・中編（前書き）

後編まで今日書けたらいいな

炎の体育祭・中編

さて、６種目目は応援合戦。スバル君は練習してません、どうなるのでしょうか・・・

「さあ、早く準備しなさい！はい、ゴン太、定置に準備！」

声を張り上げる委員長、応援合戦にはそれ専用の賞があるから本気だ

「あの、委員長、僕何やればいいの？」

なんも知らないスバル、委員長は

「スバル君は、ロックマン様に変身してなさい！」

「いや、なんで？？？目立ちたくないから後ろにいるよ・・・」

「（キッ！！！）やるわよね」

どす黒いオーラでスバルを脅す

「いや・・・でも・・・」

「だいいち、ロックマン様が出るっていう設定でみんな練習してきたんだから」

拒否権はなし！ってことでやるはめに

「スバル君頑張ってね♪私も歌って頑張るから♪」

青組はロックマン×響ミソラで勝負！って、チート並に卑怯なわけで・・・

「それじゃあ行くわよ！」

「「「

ゴン太は気絶・・・しかし、観客は盛り上がる。

「それじゃあ行くよ（ごめんスバル君、つい抱きついちゃった）」

てへっ、とやられるとスバルも怒れないわけで。この後ミソラのライブのごとく、歌いまくって当然応援は一位である。

そして終了後・・・

「ごめんゴン太！ついつい力入った」

「スバル・・・気にするな・・・この後は、まかせた」

「ゴン太！しっかり、まだ出る競技あるんだよ」

「スバル君・・・ちょっと来て」

ゴン太に謝っていると後ろには鬼が・・・

「いっ委員長、すみませんでしたぁ！！！」

怒られるかと思っていたら、委員長は優しい声で

「怒るために呼んだんじゃないわよ、ありがとねって・・・」

「えっ！」

「勘違いしないでね！ロックマン様にありがとうって言ったの！・・・まあ、スバル君も少しは頑張ってたと思うわ、ほんの少しね」

顔が赤い委員長、

「さあ、ごはん食べるわよ！」

みんなで昼食の時間になるのだった

昼食

昼食、それはスバルにとっての唯一の休憩時間

ちなみに、スバルが一緒に食べているメンツは、スバル、ミソラ、委員長、ツカサ、ジャック、ゴン太、キザマロの計7人

「「「「「「「いただっきまーっすっっっ！！！」」」」」」」

楽しく会話している中

「スバル君、おいしい？」

「うん」

スバルとミソラが付き合っていることを知らないみんなは、スバルにキレかかる。特に

「スバル君、どーゆうことかしら？」

委員長のオーラが真っ黒になる

「うっ、もぐもぐ、・・・（どうしよ）そっそーいえば、ツカサ君、マラソンっていつやるんだっけ？」

「う～んとさ、９種目目だから、後ふたっつ競技に出てからだよ」

「おいスバル、お前も出るのか？」

ジャックが聞いてくる

「うん！ジャックもでるの？」

「もちろんだ、勝負だ！」

強敵が現れる、ジャックは運動神経抜群。しかし、スバルも負けられないのだ

「絶対！僕が勝つよ、ジャック！」

「負けねえな、お前なんかに！」

スバルｖｓジャック・・・どっちが勝つのかは後にして食事は続く

「それで、なんでミソラちゃんがスバル君の弁当を作ってるんですか？」

キザマロが話を戻してしまう

「そうだぜスバル、なんでだよ」

ゴン太も聞いてくる

「スバル君、説明しなさい！」

委員長は、鬼のオーラ

「（どうしよう・・・）うんとさ・・・」

いい言い訳が見つからず困るスバル・・・。

「なんでって、私がスバル君の家に住んでるからだよ♪」

ミソラの助け船は、ときにスバルを奈落の底へ陥れる

「ス～バ～ル～君！！！説明しなさいぃぃィ！！！」

やばいよ、やばいよ！スバルの逃げ場がなくなる、

「（ミソラちゃんどうしよ？）」

「（任せて♪）だって私たち付きあ「ワァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！」」

「ごちそうさまっ！！！そこらへん走ってくるね！！！！」

スバルの断末魔で、ミソラの言葉は遮られる。そして逃げるように、いや、逃げたスバル。

「まって、スバル君」

おっていくミソラ

「（まさかあの二人・・・・・！！）」

委員長は感ずく、ツカサ&ジャックは前からそうなると予想していたため別に驚かない

「ゴン太くん・・・ミソラちゃんは何を言おうとしてたんですかね？」

「さあ、牛丼もっと食べるぜ！！！」

「いや、ゴン太くんはそればっかじゃないですか」

何も気づかない、いつもの二人。それでも楽しかった昼食だった

炎の体育祭・中編（後書き）

明日テスト・・・・・最悪

炎の体育祭・後編（前書き）

明日から、当分書けないかも・・・
とりあえずの体育祭編終了です

炎の体育祭・後編

7種目目・学年レクリエーション

レクといえば、玉入れなんかがよくやられますね。今回はシッポ取りです！

「シッポ取り・・・（これも走る競技じゃん）」

文句を言いながらも、試合開始・・・その直後！

「えっ！取られたァァァ！」

スバルまさかの瞬殺、一方出場していたキザマロは

「よし、もう一本。」

なぜか上手い、体が小さいためだろう。

「終了♪さあ、集計です」

キザマロが活躍していたが結果は・・・

「青組は9本、びりで～す♪」

ミソラが明るく発表するのとは逆に、キザマロはテンションダウン

「9本って、僕7本はとりましたけど・・・」

因みに個人で考えれば、キザマロは一位。チーム力（スバルの無駄死）が無ければいい線だったのに・・・あ～あ

しかも、キザマロは褒められはしなくとも、スバル達が委員長に叱られると思っていたら

「ほら、さっきのはしゃあないから。団体で一位取るわよ！」

「「「おう！！！」」」

なんとまさかの、キレなかった。スバルは安心、キザマロは面白くない・・とはいえ、団体競技へ移るのであった

団体競技・ムカデ競走

ありきたりの競技。作者もやりましたね、今年。どーでもいい情報？それじゃあ進めますね話

「委員長、僕練習してないよ」

「大丈夫、あなたは、外でリズムやってればいいの」

渡されたのは、フライパンにお玉。ベターなアイテム

「分かった！これならできるね」

「スバル、任せとけよ」

そう豪語するのは先頭のゴン太、キザマロは中央、委員長は最後だ

「位置についてー　よーい　バンッ！！！」

ちなみに、今のスターターは先生、。ミソラも加わっています

「いっち、にー、さん、し、いっちに！、いっちに！」

スバルも一生懸命フライパンをたたく、しかし・・・

「あてっ、ごめん」

ゴン太が途中一回こけて、結果3位・・・更に優勝が遠のく

「中間総合得点発表しま～す♪一位赤組５８６、二位白組５４６、三位黄組５３９、四位は私のクラス青組で５３６！そして五位が緑組で４６７点で～す♪」

赤組との差は５０点、白とは１０点差。まだ、まだいける・・・

「いい！スバル君、ツカサ君！あなたたちのどっちかが一位、もう一人が5位以内に入ればリレーでの逆転があるの！あなたたちに懸かってるんだからね」

「「はい」」

『どう思う、ジェミニ』

『ツカサでも一位は厳しいぜ・・・』

ヒカルにしては弱気な発言、ツカサで無理なら・・・スバルしかいない！

「スバル君、応援してるよ♪一位取るって約束したもんね」

「うん、絶対ジャックたちに負けないよ」

『ツカサ、勝てよ』

「勝ってくるよ・・・（一位は無理かな・・・）」

さまざまな思いが、マラソン４２．１９５ｋｍの激走に集結する！

「それでは、運動会の中でも過酷を極めるマラソン競技がスタートします」

スバルは集団の真ん中、緊張する・・・心臓のバクバクが止まらない。

「位置について・・・」

今までの練習を思い出す、タイヤ引いて、タイヤ引いて・・・

「よーい・・・」

過酷なレースが始まる、しかし、スバルは楽しもうと思う。このレースを楽しんでやろうと

「バン！！！」

スタートと同時に、ジャックは猛スピードで集団から離れていく。先行型のレースをするようだ

「（焦らずにゆっくりいこう）」

一方のスバルは、先頭集団のやや後ろの第二集団でのスタート

「（ジャック速いな・・・スバル君は？）」

ツカサは先頭集団のトップ、ジャックがよく見える位置でのスタート

・・・５ｋｍ地点・・・

「（くそ、負けるかぁ）」

スバルは着々とペースを上げ、先頭集団の仲間入り。続々と、ペースが落ちたものは脱落していく先頭集団は厳しい空間

「（スバル君、大丈夫かな？）」

ツカサはペースメーカーのように、レースを引っ張る

「（へっ、余裕じゃねーか）」

一方のジャックは、独走・・・しかしペースダウンはしているようで

・・・１０ｋｍ地点・・・

「（ついに前はツカサ君と、ジャックだけか）」

先頭集団がばらばらになり、リタイアする生徒が半分ぐらい出たところ、スバルは３位につけている

「（ジャックは越せないか）」

ツカサもだいぶペースを上げていたのだが差は縮まらない

「（余裕～～♪）」

ジャックは余裕の笑みを見せる

そしていよいよレースも後半に差し掛かるのだった・・・

・・・２１ｋｍ- 折り返し地点・・・

ここで、折り返す。スバルとツカサはほぼ同じくらいで折り返し、その少し前にジャックが折り返していた

「（ツカサ君も速いけど、ジャック速すぎる・・・でもあきらめないぞ！）」

「（スバル君意外とついてきてる、後はジャックを僕が）」

更にペースを上げる二人だった

・・・３５ｋｍ-第五給水所・・・

この給水所では、自分で用意したドリンクを飲むことができる

「（たしか、ミソラちゃんが用意しとくって言ってたな）」

そして給水ポイントには・・・ミソラが中継という名目でスバルを待っていた

「えー、こちらは３５ｋｍ地点で～す♪一位のジャック選手が今通過しました、レースも後半、果たして一位をとる選手は誰になるのでしょうか。」

「（何でミソラちゃん本人が待機・・・！？）」

「あっ、いま青組の二人が来ました、スバル君！はい、これドリンク♪がんばってね～！」

会場ではスバルへの殺気が舞っていたと言われる

「（ありがとミソラちゃん、ふう・・・行くぞ）」

ちなみに、渡したドリンクはミソラミンＤ。（ドーピング！？）

ドリンクが聞いたのかペースを上げて、ついにツカサを越したスバル

「（ツカサ君、先行くよ）」
「スバル君・・・ジャックに勝ってね」
「うん、絶対！」
「（スバル君・・・こんな速かったっけ、まさか負けるとは）」
ツカサの前方、１００ほど前にジャックは走っていた
「（ツカサのやつ来ないな、俺の独走で終わりだな）」
しかしジャックは着実にペースが落ちてきていた
・・・４０ｋｍ・・・
「（あと、３０ｍくらいかな・・・）」
ジャックがきずかないように、静かにペースを上げてきたスバル
「（ツカサのやつようやく来たか・・・だが、俺が勝つ）」
ジャックはツカサだと思っていた、とここでさらに差が詰まる
「・・・ジャック、勝つのは僕だ」
「なっ、スバル！（ツカサじゃないのかよ！？）」
ジャックのすぐ後ろまでつけていったんペースを落とす、スパー

トで勝負するつもりのスバル

そのまましばらく走っていく

「（チッ、仕掛けてこないのか）」

「（まだ・・・まだ、手を出さない、先に出したら負ける・・・）」

「（くそっ、なら俺から行く！）」

・・・４１ｋｍ・・・

急にペースを上げたジャック、２００ｍくらいのペースを出す

「（これでおれの勝ち）」

しかしスバルもその後をつけていく

「（ジャック、まだまだ）」

「（くそっ、これでどうだ！）

更にペースを上げる、焦っているのは丸見えのジャック

「（はやいっ！）」

「（勝ったな、惜しかったなスバル）」

しかしゴールまで３００ｍといったところでジャックのペースが

急激に落ちる

「はあ・・・はあ・・・（くそ、体力が・・・）」

スバルはこれを待っていた、残るエネルギーすべてを出して

「（うおおお！僕のかちだあああ）」

猛スピードで、ゴールテープへ向かう

「（負けるか！）はあ！はあ！」

ジャックも残る体力を使って、走る・・・のこり５０ｍ、並んだ

しかし、スバルがジャックを越した！ジャックは残り１０ｍで倒れる・・・

「（まけた・・・）」

「ジャック！」

すばるはＵターンしてジャックのところへ

「つかまって、一緒にゴールしよう」

「スバル・・・」

後ろにはだれも来ていない、ゆっくりと、しかし着実に一歩一歩

二人は、二人三脚のようにしてゴールへ向かう

・・・メイン会場ゴール地点・・・

観客が、この会場全体が、歓声と拍手をスバルに贈った

そして、ゴール・・・とともにスバルは倒れこんだ

「スバル・・・（こいつ俺を運ぶ体力なんてなかったんじゃ）」

倒れているままのスバルにジャックは、思う

「へへへっ・・・僕の勝ちだよジャック、残念だね・・・」

スバルは笑った、

そしてマラソンの表彰式前、景品について先生から発表される

「えー、景品の発表だ、一位は旅行券、二位は最新天体望遠鏡、三位はプラネタリウム装置だ」

「（えええええ、一位とんなきゃよかったあああああ・・・・）」

スバルは、崩れ落ちる

「ははは、スバル君、そんなに天体が好きなんだね」

「残念だなスバル・・・！いい考えがあるぜ」

ジャックの提案に食いつくスバル

「なに！提案って？」

「おれらの景品はお前にあげる、その代り旅行はみんなで行く。どうだ？」

スバル的には最高の提案！すぐにＯＫ

「ありがとうジャック、ツカサ君」

「それじゃあ、最後の種目の準備するか・・・」

ジャックは帰っていった、ツカサも

「それじゃあ先行ってるね」

行ってしまった、スバルもリレーは出る予定なので移動しようとした・・・

しかし、後ろから殺気が・・・

「す～ば～る～く～ん！！！なんで、みんなで旅行になってるの！」

「ミソラちゃん、なんで怒ってる？」

「（せっかくスバル君と二人きりの旅行だと思ったのに・・・）もう」

「ごめん、何か分かんないけど・・・」

「（！）じゃあこれで許す」

というと、スバルにミソラはキスする

「！！！えっ」

スバルは顔が真っ赤、幸いＴＶやみんなは見てなかった

「・・・これで許してあげる♪リレーも頑張ってね」

ミソラも真っ赤で走っていった

「・・・・・」

スバルは嬉しくて、はずかしくて、しばらく立ち尽くしていたという

ラスト・クラス全員リレー！

「いいかしら、これで一位をとれば、青組の優勝よ。負けたら承知しないからね！」

「「「了解！！！」」」

「・・・りょうかい・・・・・・」

「あらスバル君返事が小さいわよ」

「了解！！！やればいいんでしょ、アンカーを！（もうどうにでもなれ！）」

そうなのである。スバルがアンカーなのである

「スバル君、頑張ってね～♪」

ミソラが声をかける、「（はあ・・・）」とスバルは思うのだった

「（もうむりでしょ・・・）」

『まあ、頑張れよスバル』

声をかけるウォーロックの顔には殴られた跡が

「（ハープにやられたんだ・・・不憫だなあ）」

もうスバルの体力は0、後は根性だけ・・・

「仕方ない、行こうロック！」

『俺は出場しないけどな』

そして体育祭は最終決戦を迎える

「位置についてー！よーい・・・バン！！」

「「「ワァァーーー！！！」」」

青組はツカサがスタート、無事に一位順当に一位でバトンをつなぐ。が、

「ゴン太！越されるな」

ゴン太が越されて、２位に。さらに

「キザマロォ！！」

３位・・・スバルにこっから越す力はない

「任せときなさい、スバル君。私が一位になった来るわよ」

委員長は意地で、一位になるが、その後が続かなくて４位に。そして、ついにアンカー前のミソラに

「スバル君、私が二位で来るから、後は自分で越してね♪」

ミソラがスタート、４位から一気に二位まで上がる

「頑張ってね♪」

「うん（負けられない、みんながここまでつないできたのだから）」

スバルスタート、スバルにもう力走は望めない。しかし、残る気力と、根性で一位に・・・しかし

「スバル待てやァ！」

後ろからにジャックの乱入、ジャックはマラソン後とは思えぬ激走でびりから一気に一位まで上り詰める

「（ジャックの体力は底なしか・・・）」

結果惜しくも二位で終わってしまった・・・

「（みんなに謝んないとな・・）みんな、ごめ「「「スバル（君）」」」」

「よく頑張ったじゃないの、ロックマン様程じゃなかったけど」

「スバル、お前はよく頑張ったぜ。だから謝るなって」

「スバル君、僕はもう感動です・・・」

「スバル君、よく頑張ったね。マラソン、僕がジャックに勝てればなあ、残念だよ」

「スバル君♪ほらみんな怒ってる？褒め称えてるじゃん、だから、最後だけ負けたからってみんな責めるようなことしないよ。さあ、終わったし帰ろうよ」

「みんな・・・・・」

こうして、一位赤組、二位青組という惜しい結果で終わった運動会だったのだ。しかし、結果なんかより、友情や絆、素晴しい思い出という宝物を心に刻んで、体育祭は幕を閉じるのであった・・・

～ある客席～

「体育祭も終わったか・・・わたしの作戦を実行だ、ハイド」

学校の客席でマドーラは見ていた、体育祭と、スバルとみんなを

「はっ」

「やつらはみんなで旅行らしい、そこを狙え」

そのころ、マドーラが動きだしていたことをスバル達は知らなかった・・・

炎の体育祭・後編（後書き）

感想送ってね

帰宅後（前書き）

ほのぼの書いてみました、ストーリーは進んでません

帰宅後

～体育祭後・スバル宅～

嵐のような一日も終わり、今は休息のとき

「「ただいま」」

家に着くなり、ソファに突っ込むスバル。足の限界を超えていたのだろう

「疲れたぁ・・・」

「スバル君、がんばったね」

ミソラがのぞきこんでくる、しかしスバルは応答する体力もなかった

「・・・・・」

「スバル君？あれ寝た？」

そのまま深い眠りに・・・

「お母さん、スバル君寝ちゃったよ。」

「布団掛けてあげて。ご飯時には起きると思うから」

ちなみに大吾は仕事に戻ったため今は家にいない

「Ｚｚｚ・・・」

「（可愛い寝顔・・・私も眠くなってきたな・・・）」

そして気づけば二人とも深い眠りについていたのだった

「お二人さん、ごはんですよ」

「ふぁい？」

ミソラはすぐ起きた。が、

「Ｚｚｚ・・・」

当然のごとく起きないスバル

「起こしましょうか？」

「う～ん、そうね。そろそろ起きてもらうかしら」

時刻は８時。帰ってきたのが４時ごろだから、昼寝といてはそろそろ起きてほしい

『俺に任しとけ』

ロックが出てくる。スバルを起こすのは嫌いなはずだが

『ポロロン、どんだけＫＹなのよ。あんたは今出てくるときじゃないの』

『ケッ、お呼びじゃないってか』

そうして、二人（２匹？）はハンターに入っていった

「ミソラちゃんにここは任せるわね」

そういうと、あかねも台所に行った

「スバル君！おきろ～！」

「Ｚｚｚ・・・」

こんな甘っちょろい攻撃では起きない

「もう・・・（！？いいこと考えた）」

何か思いついたら即行動。スバルにキスをした

「・・・・ん！うおんんん」

言葉になってないよスバル君・・・

「起きた？おはよ～♪」

ミソラは平然と聞いてくる

「いや何で？？？キスして起こす？？？」

顔が真っ赤なスバル

まあこうして起きたのちご飯中にはあかねにいろいろとミソラとのことを突っ込まれてゆであがったタコのように顔が真っ赤になったスバルだった

「ふう、ロック寝よう」

風呂から上がって寝る支度を始めるスバル

『あの女と一緒に寝ないのか？』

「そうだよスバル君♪一緒に寝よ」

風呂から上がったミソラがロックの言葉に追撃

「いや、さすがにそれは・・・」

抵抗するスバル

「一回寝たじゃん♪いいよね」

「いやあれは僕が寝た後だったし・・・不可抗力だったし」

後もう少し、と呼んだミソラは演技力を活かして

「・・・だめ？」

上目遣い＆涙目の必殺技できく

「（うっ）・・・・・はあ、いいよもう」

仕方なく折れたスバルに勝ち目があるわけないわけで

「うん♪」

こうして眠りに着いた二人だった・・・と思いきや

「（寝れねぇぇ！）」

スバルは緊張して眠れない

「Ｚｚｚ・・・」

ミソラが抱きついているため身動きもとれず一人焦るスバル

「（どうしよどうしよ）」

「・・・・・ママ、行かないで・・・・スバル君・・・・」

「（！？）」

ミソラの顔をみると泣きかけていた

「（ミソラちゃん、大変な過去を背負っているのに・・・いつも笑顔で・・・）」

スバルはミソラの頭をなでて、ミソラが落ち着いたところで眠った

『（あー！何がなんだか、全くわからん）』

ロックはこのぽかぽかの空気にまだ慣れていないのだった

帰宅後（後書き）

感想ください！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4615z/

流星のロックマン４　～Ａτλαντ??　mystery～

2012年1月4日09時45分発行